

伊藤(東)左京亮殿

黒田長政祐慶
ニ書ヲ遣リ政
道ニツキ注意
ヲ與フ

三五二 黒田長政書狀

- 一、二日一度御定候而、御目見登城可有事、
- 一、節々御上京御無用候事、
- 一、御小姓をさなき衆之側に御入候儀御無用事、節々御著合も不入事、
- 一、内證太郎右衛門申聞候儀、可被聞召事、
- 一、爲年寄東紀學校其外何_ニ御六ヶ敷候共、御宿老衆とは細々御參會尤候事、
- 一、爰元(江戸)大勢人被置候儀不入事、
- 一、船等之儀者、拙者留守居之者申置候之間、伏見え之御上下可被仰付事、
- 一、御貯之儀、日記銘々被成候而、如水頓而被罷上候間、御談合可被成事、
- 一、上之儀あたにも思召候者、御罰御當候はんと我等者存寄候事、
- 一、御家中之者御成敗之儀共者、我等え御談合可有候、卒爾被仰付間敷事、

一、廿より内諸事、御心之儘候而者、人に御成有間敷と存候間、晝夜御心遣肝
要存候、以上、

卯月廿日(慶長八年カ)
伊東修理殿(祐慶)

黒田甲斐守(長政)

三五三 徳川秀忠書狀

就(江戸)當城(鑑カ)作事、鉸如目錄到來、喜思召候、委曲土井大炊助可述候也、
三月十五日(慶長十一年カ) 秀忠公御黒印

伊東修理大夫とのへ

三五四 徳川家康書狀

其許(名古屋カ)普請被入精之故、本丸早々出來、悦思食候、炎天之時分一入苦勞候矣、
六月廿日(慶長十五年カ) 家康公御黒印

伊東修理亮とのへ

家康祐慶ノ城
普請助役ノ勞
ヲ稿フ

祐慶城修築ニ
助役ス

三五五 德川秀忠書狀

爲見廻被申越、殊帷子五重、遠路念之入候儀、不羣是非候、此比上國之由、然者
於其地(名古屋カ)普請之旨、誠以苦勞之到候、猶大久保相模守可申送候、謹言、
(慶長十五年カ)五月十四日

秀忠公御居判
伊藤修理大夫殿

祐慶伊豆宇佐
美ヨリ割石ヲ
江戸ニ運ブ

三五六 德川家康書狀

割石如目錄到來、悅思召候、猶安藤對馬守可申候也、
(慶長十七年)四月七日

伊東修理大夫とのへ

三五七 諸大名誓狀

敬白天罰靈社起請文前書之事

秀忠大坂役ニ
當リ諸大名ヲ

シテ誓狀ヲ提
出セシム

一、奉對(家康・秀忠)兩御所様、不可致別心表裏事
一、對背上意輩、一切不可申談事
一、被仰出御法度以下、毛頭不可申相背事
右之條々、若於致違背者、忝カ上者梵天帝釋、四大天、廿八宿、下者堅牢地神之
三十六禽、別而伊豆箱根兩所權現、三嶋大明神、熊野三所權現、稻荷、祇園、賀茂
上下大明神、松尾、平野大明神、諏訪大明神、正八幡大菩薩、天滿大自在天神、愛
宕大權現、摠而日本國中六十餘州大小神祇、殊氏神部類眷屬、各罷蒙神罰、冥
罰深厚、於今生者、受白癩黑癩重病、於四十貳骨、於來世者、令墮在無間地獄、浮
世更不可有之者也、仍起請文如件、

慶長十九年九月七日

本田佐渡守殿
酒井雅樂頭殿

三五八 德川秀忠知行宛行狀

伊東文書

秀忠祐慶二宮
崎郡内五萬七
千餘石ヲ宛行

日向國宮崎郡之内、所々都合五万七千八拾石餘目錄在別紙、事宛行之訖、可令全領知之狀如件、

元和三年五月廿六日 御朱印

伊東修理大夫とのへ

秀忠祐慶ノ大
坂城普請ニ助
役ノ勞ヲ稿フ

三五九 德川秀忠書狀

今度大坂普請之儀、入精之故、早速令出來之段、悅思召候也、

(元和五年) 十一月廿一日

御黒印

伊東修理大夫とのへ

幕府年寄衆ノ
添狀

三六〇 江戸幕府年寄奉書

今度大坂普請之儀、被入御念、被仰付候故、早速出來之段、別而被思召御感候、下々辛勞之程、自拙者共懇可申之旨、上意候、恐々謹言、

(重信) 安藤對馬守判

(元和五年) 十一月廿一日

(利勝) 土井大炊助判

(正純) 本多上野介判

(忠世) 酒井雅樂頭判

(祐慶) 伊東修理大夫殿

三六一 德川秀忠書狀

今度大坂普請之儀、萬事入念、依申付、早速出來、悅思召候也、

(元和六年) 九月十一日

御黒印

(祐慶) 伊東修理亮とのへ

三六二 長崎奉行長谷川藤廣書狀

態申入候、仍長崎家持罷有唐人共、其許え申分候而、此唐人差越申候、様子被聞召届、異國人之事、御座候間、可然様御差引御申付尤候、委細者此唐人可申候、恐惶謹言、

(元和七年) 八月廿四日

長谷川權六

長谷川藤廣長
崎在住唐人ノ
訴訟ニツキテ
書ヲ祐慶ニ與

伊東修理様(祐慶)

尙以我等へもケ様の書物を以申候間、其許へ其書物四つ遣之候、御披露可有候、以上、

三六三 德川秀忠書狀

就今度上洛之儀、裏付袴三到來、入念之段欣思召候、尙酒井雅樂頭(忠世)可申候也、

(元和九年)六月四日

御黒印

伊東修理大夫とのへ

祐慶秀忠ノ上
洛ニ際シ音信
ヲ呈ス

三六四 德川家光知行安堵狀

日向國宮崎郡之内所々都合五万七千八拾石目録在別紙、事、任去元和三年五月廿六日先判之旨、全可領知者也、仍如件、

寛永十一年八月四日 御朱印

伊東修理大夫とのへ(祐慶)

德川家光祐慶
ヲシテ當知行
ヲ安堵セシム

第三類

伊賀國古文書

東寺文書

益永家證文寫

字佐八幡宮御造營證類

前田侯爵家所藏文書

丹波安國寺文書

志賀文書

天龍寺造營記錄

妙本寺文書

後藤家古文書

大友文書

五條文書

阿蘇文書

相良文書

島津公爵家所藏文書

島津公爵家所藏樺山文書

色川本島津文書

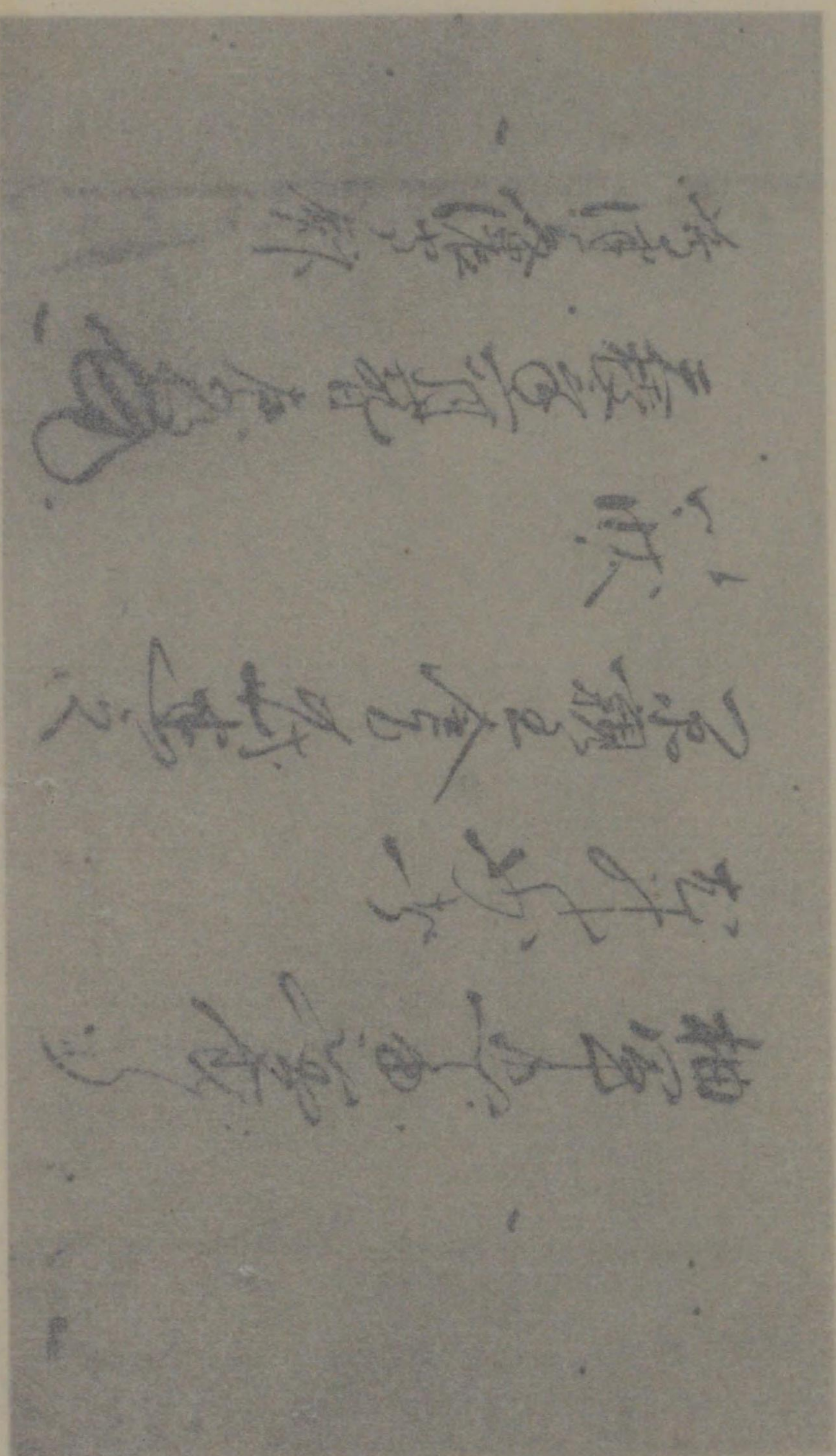
北郷文書

中村文書

野邊文書

鬼束文書

山田文書

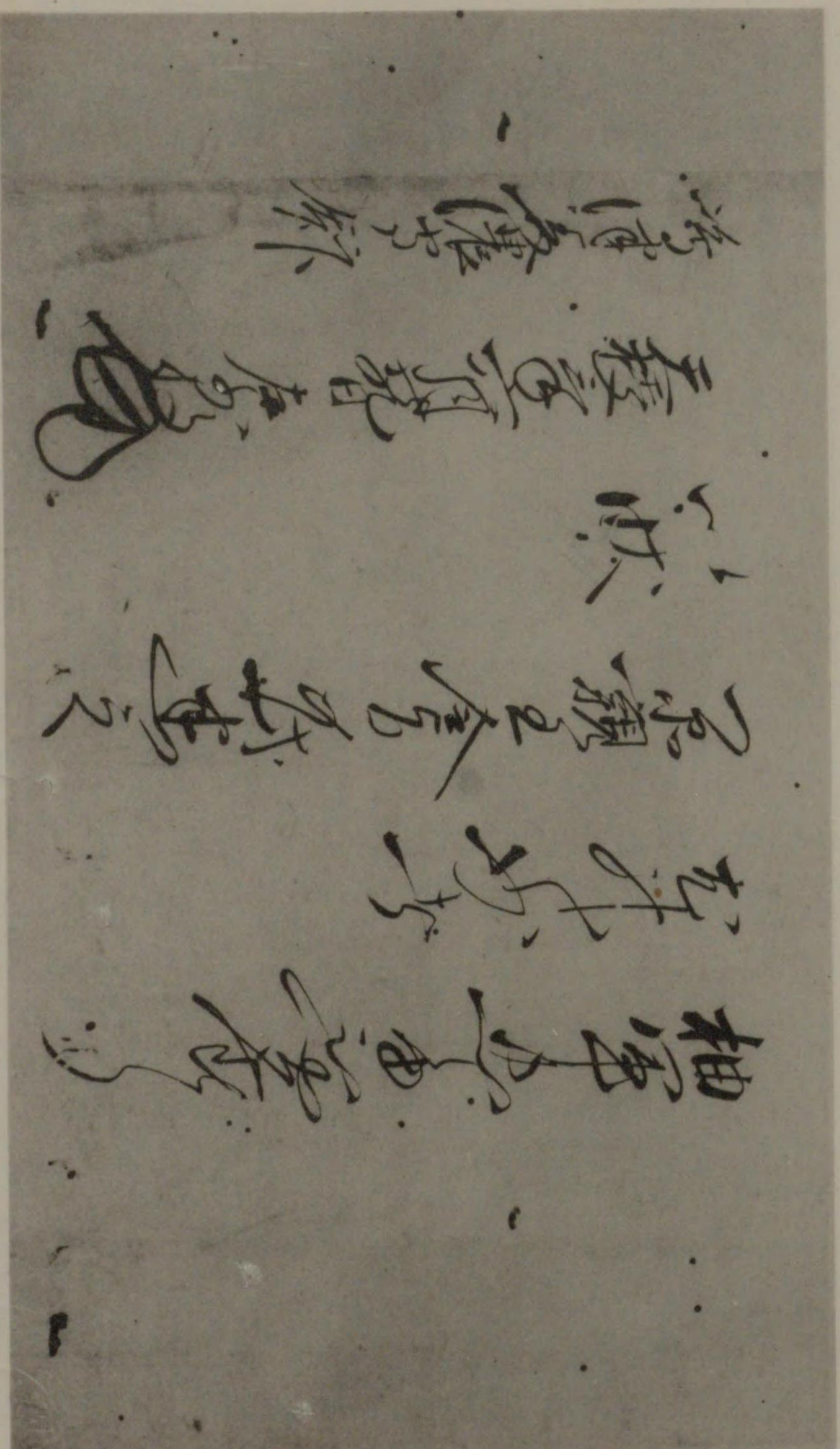


征西大將軍宮懷良親王命令旨 島津公爵家所藏

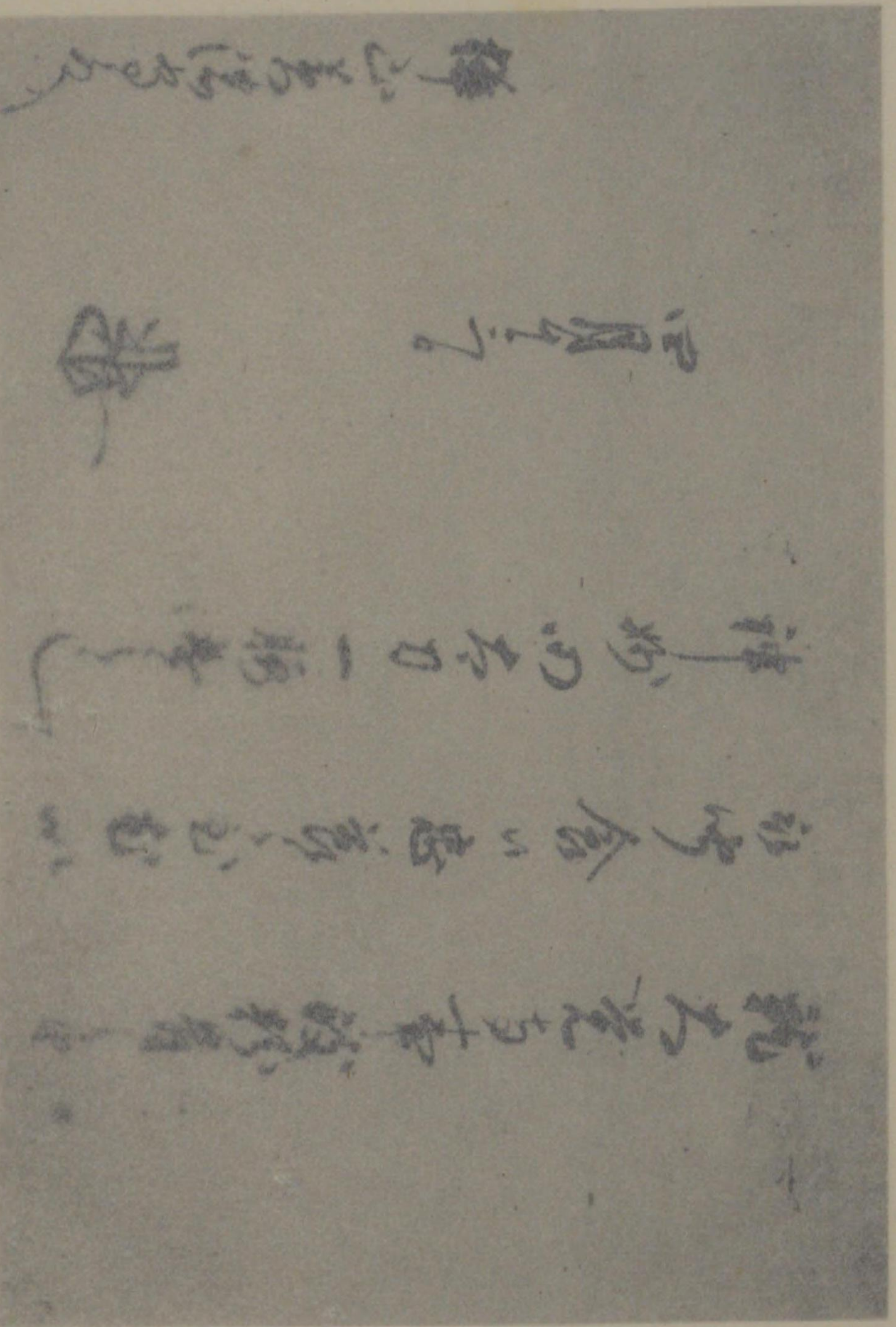
(第三類一五七號文書)

伊賀國古文書
 東寺文書
 益永家證文書
 宇佐八幡宮御造營證類
 前田侯爵家所藏文書
 丹波安國寺文書
 志賀文書
 天龍寺造營記錄
 妙本寺文書
 後藤家古文書
 大友文書

五條文書
 阿蘇文書
 相良文書
 島津公爵家所藏文書
 島津公爵家所藏權山文書
 色川本島津文書
 北郷文書
 中村文書
 野邊文書
 鬼束文書
 山田文書



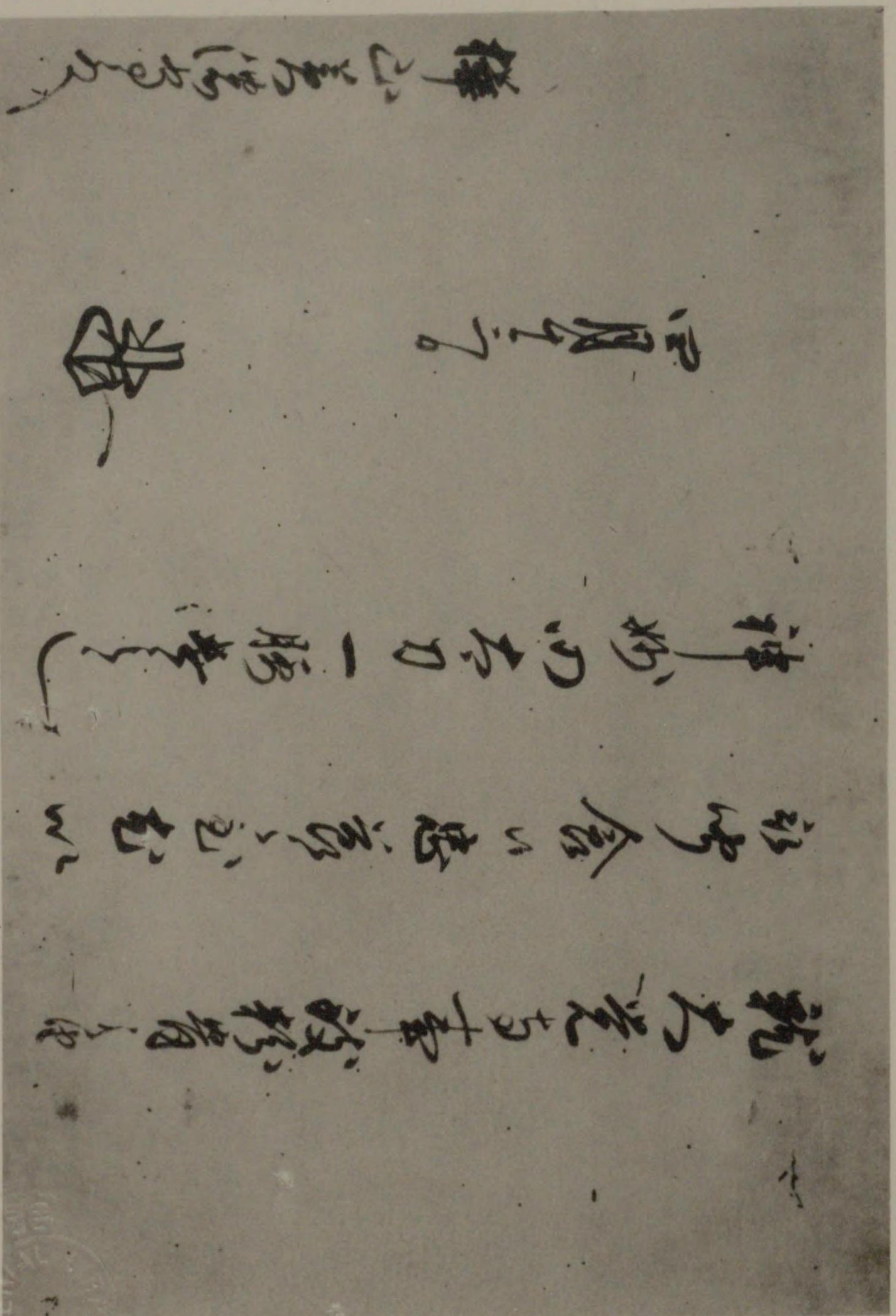
征西大將軍宮懷良親王令旨 島津公爵家所藏



足利義教感狀
島津公露家所藏

(第三類一六四號文書)





足利義教感狀
島津公爵家所藏

(第三類一六四號文書)

伊賀國古文書

一 大宰府宣案

廳

定造 觀世音寺五重塔行事

一層 筑前國 大隅國

大監 秦宿禰則重 監代 伴朝臣政忠

二層 肥後國 豐後國

大監 紀朝臣資方 監代 上毛野永俊

三層 筑後國 日向國 豐前國

大監 紀朝臣有賴 監代 惟宗爲兼 少典 橘信貞

四層 肥前國 薩摩國

大監 秦宿禰重宗 監代 大藏朝臣兼孝 監代 安部經安

大宰府觀世音寺五重塔築造ノ課役分擔ヲ定ム

五層 寺家

大監大藏朝臣種輔 監代秦宿禰倫定

右所定如件、

承德三年九月廿二日

權中納言兼都督大江朝臣(匡房)判、御

東寺文書

二 將軍源實朝家政所地頭辨濟使職安堵下文案

(朱書)
御下文案

政所下 宇佐神官等

可且依先度政所下文、且任亡母佐伯四子讓并證文等、以宇佐宿禰公定、令領掌官領日向國浮田庄地頭弁濟使職事、

副下 讓狀并證文等、

右彼公定解狀、件庄地頭弁濟使職者、親父故公通宿禰爲相傳私領、相副調度文書於手繼、讓得亡母故佐伯四子之後、任□狀賜政所御下文、本役神事之外、爲不輸免、年來領掌、而去建久九年六月比、有所勞之時、知行所領等雖分與數子、依有遺恨、彼處分狀等、即時令破捨、更不及分与、而中子以何可申所帶之由哉、抑政所御下文、并次第證文等、令備進之由、載于狀之條、何時御下知何證文哉、非無不審、尤可有御尋也、故四子之時、所賜於政所御下文、并次第證文等

源實朝宇佐神官等ニ令シテ
佐公定ナシテ
浮田庄地頭辨
濟使職ヲ領掌
セシム

中子同職ヲ所
帶スベキ由ヲ
鎌倉ニ訴フ

公定知行スベ
キ由チ陳ズ

先ノ政所下文
及ビ四子ノ讓
狀ニ依リ公定
シムテ安堵セ

者相副手繼令讓得公定畢、是上又可證文哉、但所領田畠之習、依父母之手
繼次第證文也、輒不可及、今案無盡之詞哉、先日處分破却之後、各不知子細之
間、今度所勞重病最後申云、所領處分之條者、年來各所分与置也、雖然未及披
露、至于死後、公定令申可計之由、彼處分狀納覽、管令渡得畢、苟公定爲嫡子之
上、各處分可支配之由被申、仍副進之、非一人之事、凡付旁不能一口論、但公
定之書狀案、申證文、其故者爲中子得分至令妨者、尤可備進、今無指讓狀
以何爲本牀、彼書狀可備證文乎者、可且依先度政所下文、且任亡母讓狀等、令
領掌公定之狀、所仰如件、神官等宜承知、不可遺失、故下、

建仁三年十一月 日

案主 中原

別當宮内大輔藤原朝臣在判

少從民部錄惟宗在判

前右馬權頭平 朝臣在判

知家事前宮内錄惟宗在判

勘解由次官平 朝臣在判

兵部權大輔藤原朝臣在判

前備後守藤原朝臣在判

政所惣檢校益永家職掌證文寫并諸事

三 北條泰時加判宇佐嗣輔解狀案

在御判鎌倉賴經將軍執權北條武藏守
泰時也、是泰時ノ實判也、

宇佐嗣輔謹言上、

欲被且依先御下知狀、且任證文道理、停止昌秀謀書、如本賜御下知、豐前國
江嶋別符、小犬丸名、并秣系永、日向國細江別符事、

副進

先御下知等并次第證文等、

(右四カ)

□箇所之中、於小犬丸田畠者、當宮權大宮司昌隆私領也、而以去年長寛二
年昌隆死去之後、嫡女宇佐太子、相副次第公驗讓得之上、得嫡子通昌書狀、至
于建久五年三十三年之間、無恙領知畢、爰以去文治四年故右大將殿御時、昌
秀親父昌直法師、不帶一紙證文、暗致訴訟之日、太子代官榮賢且昌直法師、於

宇佐嗣輔昌秀
ノ謀書ヲ止メ
細江別符等安
堵ノ下知ヲ下
サレシコトヲ
幕府ニ請フ

小犬丸ノ田畠
ハ宇佐太子相
傳知行ス

昌直法師訴訟
ヲ起ス

政所惣檢校益永家職掌證文寫并諸事

藤原三子讓得
ス

嗣輔讓得ス
昌秀押領ス

秣系永及ビ細
江別符ハ忠輔
榮重ヨリ買得
ス

大宮司公仲押
領ス

嗣輔讓得ス

大庭御前被召問之日、昌直法師不及一口之論、令□□太子、向後不可有違亂
之由蒙御裁許、□□民部(大輔)太夫盛時奉書顯然也、其後昌直法師太子令歸伏、書
與起請畢、以建久五年、自太子之手、女子藤原三子讓得畢、至于今年二十七年
之間領掌之、此之間(號力)忠輔妻領、大宮司公仲并廣經等五箇年押領、雖然去年
被停止彼妨畢、自三子之手、嗣輔讓得畢、爰昌秀如此不顧子細、恣無左右致押
領之間、子細何様事哉之由、令相尋之處、號御下知取出彼案、令書寫之處、不令
書寫、令相奪云々、令成疑殆之處、眼前仰謀書之由、蒙仰畢、尤以昌秀罪科不輕
歟、既以田三十餘町、令取畢、如之數多在家併以令追捕畢、與力人舅榮重姉
智僧神順之舅政家、字稻男、小十郎等也、又秣系永并日向國細江別府者、同昌
隆私領也、同女子(太子カ)□□讓得畢、自太子之手、息榮重讓得畢、自榮重之手、嗣輔
父忠輔、令買取畢、爰當大宮司公仲宿禰、無故令押領之間、去年賜御下知畢、自
忠輔之手、嗣輔讓得畢、乞領知之次第、只如小犬丸也、於此三箇所者、代々既經
六十餘年畢、就中於小犬丸者、既故右大將殿御時事切畢、至于昌秀者、一日片
時不令領知、且依代々御下知之狀、被停止謀書、任實正、昌秀并與力人等被行

罪科、且員數田、苜類并追捕物等、懸榮重神順政家等、一々欲被糺返矣、仍言上
如件、

承久三年八月日

宇佐嗣輔宿禰

宇佐八幡大神宮御造營中古證類

四 大宰府加判造宇佐宮惣大工大神國貞解狀案

造八幡宇佐宮惣大工兼辨官大神國貞解申進申文事

請被且依先例且任例文并度々府宣及府行事所御下文等賜御下知致沙

汰諸番匠作新百疋別十疋缺物子細狀

副進 例文并府行事所御下知狀

右謹檢舊貫三十三年一度當宮造替之時筑前筑後肥前肥後豐前豐後大隅
薩摩日向國等之所課爲惣大工之沙汰令支配諸番匠百疋別十疋之缺物致
其沙汰者先例申且度々府宣嚴重之上當先度主典行事監代助兼依□致猶
々之沙汰爲貫首行事米生大夫之奉行可沙汰渡之□府宣明白也者且依先
例且任度々府宣并今度府行事所御下文旨賜御下知爲被致其沙汰勒子細
言上如件以解

大神國貞諸番匠作料百疋別十疋之缺物ノ沙汰ヲ安堵シテメラレシメテ大宰府ニ請フ

嘉祿三年十二月三日

惣大工大神朝臣國貞上

裏ニ

件番匠作新百疋別拾疋宮大工缺物事申任例文并府宣之狀可致其沙汰之狀如件

沙彌在判

少貳藤原朝臣在判

沙彌ハ越中左衛門入道殿少貳ハ資賴朝臣

件缺物事早可依先例之

左衛門尉中原在判

筑後守藤原在判

大宰府國貞ヲシテ右ノ宮大工ノ缺物ヲ沙

前田侯爵家所藏文書

五 清水谷禪尼置文案

清水谷禪尼置文案
田庄ニ鷹司氏
但シ半分ヲ興
福寺尊光院ノ
壽法印一期ノ
問之ニ譲ル
公壽死後ハ其
申百五十石ヲ
公壽ノ弟子ニ
與フベシ

（浮田）の庄をりつりされひめ御前よゆつりまいらせて候、そふんの公壽
法印一このゆつりさひて候、後よは本庄よかへしつ象候へと申候、き、志
（相模守）の殿御いのりれくれう京百五十、こう壽法印弟子ともの中
よ申をきて候物よ、ささしわさされ候へく候、ふみ殿へ京百石さうせちに
ささ候へく候、

正應四年二月十七日

（清水谷禪尼カ）
在判

六 某置文案

某置文案
浮田庄ニ本
所ノ違亂ヲ止
浮田庄小松方

日うりの國うきさの庄の事、代々相傳志さいなく候う、あるわつらひある
ましきとこよて候を、本所よりみたりのささ候へとも、かまくらふてもう
（小松方）を、東北院のさんしの御房
へ永代まいらせて候、本所の年く申分を、こふつりさよてけいなく御
ささ候へく候、き、志、かまくらのいれりのく料百五十石を、志、水き、の
故禪尼の世よ、故、そう正にこまつ方の年くのうちを申つ象て候し事よ
て候へ、の分のこれよりゆつりまいらせ候、まて候、す、こまつり
さ、一、い、せ、さ、ふ、ら、ぬ、い、く、め、り、に、本所よりも公家よりも、
ひふんの御ささいてきてさふらんのをりなりのりせうよて、申ひらかれ
て、むつらひをとめられ候、んれうよまいらせ候時よ、す、志、の世にらう
ろ、う、ち、ふ、ら、ん、を、り、も、ろ、と、も、御ささ候て、いくめりさわつらひなく候
へく候、さしそなされて御ふささ候へ、この御けいやくそやぬれ候へく
候、そのをりゆめ、御いらん候ましく候、あなりしこ、

チ興福寺東北
院禪師覺深ニ
寄ス
本所へノ年貢
半分ハ小松方
ヨリ出スベシ
鎌倉祈禱料ト
シテ小松方年
貢ノ中ヨリ百
五十石ヲ前ニ
公壽ニ譲ル

のささ候て、むつらひをとめられ候、さ、志、ある、ゆる、す、志、ふてもらう
（半）
ろ、う、候、い、さ、ら、ん、き、め、に、當、庄、の、う、ち、こ、ま、ゆ、り、を、東、北、院、の、さん、し、の、御、房
（覺深）
へ、永、代、ま、い、ら、せ、て、候、本、所、の、年、く、申、分、を、こ、ま、つ、り、さ、よ、て、け、い、な、く、御
（懈怠）
さ、さ、候、へ、く、候、き、志、か、ま、く、ら、の、い、れ、り、の、く、料、百、五、十、石、を、志、水、き、の
（清水谷）
故、禪、尼、の、世、よ、故、そう、正、に、こ、ま、つ、方、の、年、く、の、う、ち、を、申、つ、象、て、候、し、事、よ
（生目）
て、候、へ、の、の、分、の、こ、れ、よ、り、ゆ、つ、り、ま、い、ら、せ、候、ま、て、候、す、こ、ま、つ、り
（とカ）（訴訟）
さ、一、い、せ、さ、ふ、ら、ぬ、い、く、め、り、に、本、所、よ、り、も、公、家、よ、り、も、
（とカ）
ひ、ふ、ん、の、御、さ、さい、て、き、て、さ、ふ、ら、ん、の、を、り、な、り、の、り、せ、う、よ、て、申、ひ、ら、か、れ
（とカ）
て、む、つ、ら、ひ、を、と、め、ら、れ、候、ん、れ、う、よ、まい、ら、せ、候、時、よ、す、志、の、世、に、ら、う
（とカ）
ろ、う、ち、ふ、ら、ん、を、り、も、ろ、と、も、御、さ、さ、候、て、いく、め、り、さ、わ、つ、ら、ひ、な、く、候
（とカ）
へ、く、候、さ、し、そ、な、さ、れ、て、御、ふ、さ、さ、候、へ、この、御、け、い、やく、そ、や、ぬ、れ、候、へ、く
（とカ）
候、その、を、り、ゆ、め、御、いら、ん、候、ま、しく、候、あ、なり、し、こ、

元應二年十月十日

判

（覺深）
とう北院の禪師御房へ

七 僧良壽讓狀案

良壽浮田庄小松方ヲ東北院覺圓ニ讓進ス

浮田庄内小松方讓進上候、永代御管領不可有相違候、以此旨可令洩披露給、良壽誠恐頓首謹言、

正中三年四月廿六日

良壽判

進上 (東北院雜掌) 三位得業御房

八 光嚴院院宣案

光嚴院東北院覺圓ヲシテ浮田庄大墓別符等ヲ安堵セシメ給フ

日向國浮田庄内小松方、并同國大墓別符御當知行不可有相違之由院宣所候也、仍上啓如件、

建武三年九月廿日

(四條) 隆蔭

謹上 (覺圓) 東北院僧正御房

九 足利尊氏知行安堵狀案

御門跡領以下事、如元御知行不可有相違候、恐々謹言、

建武四年二月七日

權大納言尊氏御判

東北院御房

一〇 足利尊氏知行安堵狀案

尊氏土持親綱伊東祐爲ヲシテ畠山義顯及比松浦黨ノ浮田庄小松方及比大墓別符等ニ亂妨スルヲ止メ下地ヲ東北院雜掌ニ渡付セシム

御奉書 東北院雜掌申日向國浮田庄小松方、并大墓別符事、畠山助七郎、松浦一族等致濫妨云々、爲事實者甚招其咎歟、所詮伊東余一相共退彼輩、沙汰居下地於雜掌、可被注進子細之狀、依仰執達如件、

建武四年七月廿三日

(高師直) 武藏權守 在判

土持左衛門太郎殿 (親綱方)

伊東余一殿略之 (祐爲方)

一一 光嚴院院宣案

光嚴院同シク院宣ヲ今出川

日向國浮田庄内小松方雜掌申松浦黨并土持次濫妨事、東北院僧正狀 (覺圓) 副具 (耶脫方)

前田侯爵家所藏文書

五一七

書、如此、子細見狀候歟、可沙汰居雜掌於地下之由、可被仰武家旨、院御氣色所候也、(四條)隆蔭誠恐頓首謹言、

曆應元年八月十五日

權中納言隆蔭

進上(今出川家雜掌)中務權大輔殿

足利尊氏島津貞久ニ命ジテ之ヲ遵行セシム

一一一 掃部頭某施行狀案

奉書日向國浮田庄内小松方雜掌申松浦黨并土持次郎濫妨事、院宣(今出川兼季)菊亭前右大臣家御消息副解狀如此、早任被仰下之旨、可被沙汰居雜掌於地下、若有子細者、載起請之詞、可被注申之狀、依仰執達如件、

曆應元年九月八日

掃部頭在判

鳴津上總入道殿(貞久)

一三三 浮田庄小松方并大墓別符雜掌某申狀案

春日社領日向國浮田庄内小松方并大墓別符雜掌謹言上、

春日社領浮田庄雜掌某武家

ニ命ジテ三治加賀丸ノ同庄小松方及ビ大墓別符ニ亂妨スルヲ停メテ之ヲ遵行セシム

欲早被經御奏聞、被成下院宣於武家、被停止三治加賀丸非分亂妨、被沙汰居下地於雜掌、彌專御祈禱、當社領日向國浮田庄内小松方并大墓別符間事、

副進

- 一通 院宣案建武三年九月廿日當庄御安堵事
- 一通 將軍家御教書案同四年二月七日門跡領御案堵事
- 二通 武家御奉書案建武四年七月廿三日、曆應元年九月八日、可沙汰雜掌於下地由事
- 一通 院宣案曆應元年八月十五日、可沙汰雜掌於下地由事
- 七通 代々相傳證文案自餘依事繁略之

右當庄者、自清水谷禪尼以來、爲春日社大般若轉讀御祈禱料所、東北院家代々御相傳、當知行無相違者也、證文等備于右、而故前大僧正(覺圓)房時代、去建武三年之比、松浦黨寄事於動亂、無理亂妨之間、被申成院宣於武家之處、嚴密被經御沙汰、可沙汰居雜掌於地下之由、同四年并曆應元年兩度武家御奉書等明鏡也、仍當知行之處、三治加賀丸等無是非當庄亂妨之條、無道之至、言語道

斷次第也、所詮早被申成院宣於武家、嚴密被經御沙汰、被停止彼加賀丸非分
亂妨、被沙汰居雜掌於下地、爲全春日社御祈禱料足、粗言上如件、

貞和五年五月日

丹波安國寺光福寺文書

一四 足利尊氏寄進狀

寄附 丹波國八田郷光福寺

日向國國富莊内石崎郷地頭職事

右爲祈四海之靜謐、一家之長久、將亦爲救相模(北條)入道高時(法名常鑑)、并同時所所滅
亡輩之怨靈、所寄附如件、

建武二年三月一日

光福寺長老

(足利尊氏)
參議(花押)

一五 足利義詮書狀

丹波國安國寺本光福寺、雜掌道性申日向國々富庄内石崎郷事、訴狀具書遣之、
伊東又六押領云々、早莅彼所、來月廿日以前、可沙汰付雜掌於下地、若令違犯

丹波安國寺文書

五二一

一尊氏北條高時
祈族ノ冥福ヲ
國富庄石崎郷
地頭職事ニ寄
光福寺ニス

義詮一色直氏
ヲシテ伊東又
六ノ同所ヲ違
亂スルヲ停メ
シム

者、任事書旨、可致沙汰之狀如件、

觀應三年九月三日

一色宮内少輔殿

(足利義詮)
(花押)

一色範氏宮崎
村田地參拾町
地頭職等ヲ志
賀賴房ニ宛行
フ

義顯尊氏ノ命
ヲ承ケテ大友宗
雄ニ命ジテ肝
付兼重ヲ加ラシ
ム

志賀文書

一六 九州探題一色範氏地頭職宛行狀

豊後國球珠郡内小田次郎入道々覺女子跡内田地拾町、并日向國宮頭村田地參拾町地頭職事、爲勳功之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

建武四年十月二日

(一色範氏)
沙彌(花押)

大友志賀藏人太郎殿

一七 畠山義顯施行軍勢催促狀

鎮西凶徒等誅伐事、御教書如此、早任被仰下旨、令發向當國、可被追伐、(肝付兼重)三股八郎以下敵徒候、仍執達如件、

曆應二年三月八日

(畠山義顯)
源(花押)

出羽彌二郎殿

義顯宗雄ニ命
シテ宮崎庄ノ
軍勢ヲ率キテ
兼重ニ當ラシ

一八 畠山義顯施行軍勢催促狀

薩州凶徒等、爲兼重城後攻寄來之由、(清成)禰寢孫次郎早馬到來訖、早相催宮崎庄軍勢等、可被致軍忠候、仍執達如件、

曆應二年五月廿六日

(畠山義顯)
源(花押)

大友出羽彌二郎殿

宗雄三股院ノ
戰功ヲ具申ス

一九 畠山義顯證判大友宗雄軍忠狀

大友出羽彌次郎宗雄軍忠事

右任京都御教書并御施行、去四月廿三日馳參日向國三股院大井手御陣、東城戸以下警固之處、當國凶徒肝付八郎兼重黨類等、楯籠現王城之間、今月四日夜馳向彼所、即時令追落彼等翌日又押寄兼重城之追手、及散々合戰之刻、自身兩所、右肩被疵畢、戰場之次第直御見知之上者、給御判爲備後證、言上如件、

現王城ヲ攻ム

曆應貳年七月八日

(畠山義顯)
承了(花押)

二〇 畠山義顯證判大友宗雄軍忠狀

大友出羽彌次郎宗雄軍忠事

今月十三日、被打圍日向國凶徒兼重城之間、追手陣屋放火之時、致數刻合戰之刻、自身被疵、右脚射疵、若黨貞久同被疵、左脚射疵、之條、御見知之上者、給御判爲備後證、言上如件、

曆應貳年八月十八日

(畠山義顯)
承了(花押)

二一 畠山義顯證判大友宗雄軍忠狀

大友出羽彌次郎宗雄軍忠事

今月十九日、押寄兼重城追手、攻入一(城戸)致先懸合戰之刻、自身被疵、頸射疵、同

宗雄高城ノ戰
功ヲ具申ス

財部城ヲ攻落
兼重ノ子息等
ヲ生捕ル

廿七日、以若黨以下差遣財部城令追落凶徒等畢、凡去四月廿三日、發向日向國三股城御陣之以來、今月廿七日責落當城、迄于兼重子息金頭丸、同金王丸以下一族等生虜之期、每度自身被疵、連々抽忠勤之次第、悉御見知之上者、給御判爲備後證、言上如件、

曆應二年八月廿八日

(畠山義顯)
承了(花押)

義顯宗雄ノ軍
忠ヲ褒ス

二二一 畠山義顯施行感狀

日向國凶徒肝付八郎兼重退治最中之處、馳越當國、度々合戰仁被疵、被抽軍忠條尤神妙候、仍執達如件、

曆應貳年八月廿九日

大友出羽彌二郎殿

(畠山義顯)
源(花押)

二二三 畠山義顯證判志賀賴房代大森覺心軍忠狀

宮崎地頭志賀
賴房代大森覺
心軍功ヲ上申
ス

日向國宮頸地頭大友志賀藏人太郎賴房代大森掃部左衛門入道覺心軍忠事

右去月十三日、被引卷當國凶徒肝付八郎兼重之城之間、即馳參、且致宿直、且日夜及合戰畢、就中發向財部城令追落賊徒與黨等、抽忠節之條、御見知之上者、不能委細候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆應貳年九月二日

沙彌覺心

進上 御奉行所

(畠山義顯)
承了(花押)

二二四 畠山義顯舉狀

(端書)
[畠山修理亮七郎舉狀曆應二〇〇〇]

大友出羽彌二郎宗雄軍忠事

右宗雄於日州可致軍忠之旨、就被成下御教書、凶徒退治最中、馳越當國、依抽合戰忠節候、每度自身數々所被疵候畢、仍本領事、被成安堵御教書、被付其力

志賀文書

五二七

義顯宗雄ノ軍
功ヲ述ベソノ
本領ヲ安堵セ
シメラレシコ
トヲ京都ニ上
申ス

候者彌可成勇候歟、忠勤之段、若偽申候者、神祇冥道御罰於可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

曆應貳年九月三日

源義顯(裏花押)

進上 御奉行所

二五 畠山義顯舉狀

〔端書〕
〔畠山修理亮七郎舉狀 曆應二年〕

〔大友出羽彌次郎事〕

國中靜謐事、先度令申候了、愚身參上之段、急速可承御左右候、抑大友出羽彌次郎宗雄、就京都御教書、馳越當國、所々合戰、仁每度致前懸、自身數々所被疵候、凡今度抽涯分之忠仁候、本領事御沙汰候者、彌可成其勇候歟、且宗雄代官參上候、軍忠之段可申入候、恐々謹言、

曆應二年
九月三日

源義顯(花押)

謹上 武藏守殿

同ジク之ヲ尊
氏ニ上申シ本
領安堵ヲ請フ

畠山義顯宗雄
ノ伊集院ニ於
ケル戦功ヲ尊
氏ニ注進シ速
ニ本領ヲ安堵
セシメラレン
コトヲ請フ

二六 畠山義顯舉狀

〔端書〕

〔畠山修理亮七郎舉狀 曆應三年〕

〔宗雄〕

大友出羽彌次郎就當國凶徒蜂起事、馳越候、先度肝付八郎兼重退治之時、被忠勤候、今又如此候、本領安堵事延引歎申候、被經御沙汰候者、恐惶存候、恐々謹言、

曆應三年
八月七日

源義顯(花押)

謹上 武藏守殿

天龍寺造營記錄

二七 足利尊氏國富庄寄進狀案

奉寄

曆應寺

日向國々富庄除先寄進寺社領事

右爲當寺領所令寄附也、者早任先例、可被致沙汰之狀如件、

曆應三年六月十五日

權大納言源朝臣(尊氏)御判

二八 足利尊氏國富庄田島鄉寄進狀案

奉寄

大光明寺

日向國々富庄内田島鄉事、

尊氏國富庄ヲ
天龍寺ニ寄進
ス

尊氏國富庄田
島鄉ヲ山城物
集女庄ノ替ト
シテ大光明寺
ニ寄進ス

右爲山城國物集女庄替所令寄附也、者早任先例、可被沙汰之狀如件、

曆應三年七月十六日

權大納言源朝臣(尊氏)御判

安房 妙本寺文書

二九 尼明知土地賣券

うまわさしまいらむ候延年寺地事

合 東西六尺、定日目上人御墓御前也、
南北一丈、(要)

右件地、故成願□私領地、用要あるよ、日向國富田庄内日智屋寺別當御房、永年お限て、用途六百文をかかうまわさしはいらむ候ところ、志ちあり、若此地、子細候、此状をさきとして、御さ候、ん、子細あるよし、候、若無沙汰なる事候、本の用途よても候へ、又別の地よても候へ、いそき、沙汰仕候へ、候、仍爲後日、證文状如件、

康永三年大歲甲申 閏二月廿八日 故成願後家比丘尼明知(花押)

尼明知山城延年寺ノ地ヲ富田庄日智屋寺別當某ニ賣却ス

後藤家古文書

三〇 足利直冬所領宛行下文

下 後藤兵庫允光明

肥前國養父郡内村田庄地頭職、筑治間竹野新庄河北郷内安永□□民部、

日向國都於郡一方半分地頭職事、

右爲由緒之地之間、所便補恩賞也、早守先例、可致沙汰之状如件、

貞和六年九月廿日 (足利直冬)(花押)

直冬諸所地頭職ヲ後藤光明ニ宛行フ

都於郡一方半分地頭職

大友文書

沙彌淨心其所領之大友氏時義讓與シ足利宮崎庄請フ

三一 沙彌淨心申狀案

所領豐後國柴山村、戸次庄内壇原村、由布院内荒木、山崎、石松、貞恒四箇名并香野村、八坂庄内歲田村、日向國宮崎庄内調殿村、和田村、宮崎本村半分、柏田半村、景重方四郎丸公文龜鶴給分田畠、荻原田地、肥前國財部村六分壹等地頭職事、相副御下文以下證狀、令讓與惣領大友刑部大輔氏時候、可被成下安堵御下文候哉、以此旨可有御披露候、淨心恐惶謹言、

文和三年十月十六日

沙彌淨心

進上 御奉行所

五條文書

三二 征西大將軍宮懷良親王令旨

筑前國三奈木庄除弘安賞當知行輩分、并日向國飢肥南北兩郷地頭職事、可令子孫相傳給者、將軍宮御氣色如此、仍執達如件、

正平十八年九月九日

右中將(花押)

謹上 勘解由次官殿

懷良親王筑前三奈木庄及飢肥南北兩郷地頭職事五條賴元ニ宛行ハ

阿蘇文書

三三 五辻宮守良親王令旨案

爲退治大隅日向兩國凶徒所令發向給也、早率軍勢等急速馳參、可被申御共之旨、(守良親王)五辻宮令旨所候也、故以悉之、

延元二年十一月廿二日

左兵衛佐花押

(惟時)
阿蘇大宮司館

三四 後醍醐天皇綸旨案

朝敵追討事、四方官軍等不一揆、或先驅而失其利、或城守而似怠慢、就中九州士卒等、雖非無功績、各爭雄而及參洛之遲引云々、依之凶徒猶不退帝都、涉旬月之條、國家之幣庶民之憂、宸襟無聊、故爲進官軍、(懷良親王)無品親王爲征西大將軍、所有御下向也、方々官軍急速應催促、可令參洛、恩賞々罰等事、併所被委

守良親王阿蘇
惟時ノ軍ヲ召
サル

後醍醐天皇懷
良親王ヲ征西
大將軍トシテ
下向セシメ給
フ
綸旨ヲ惟時ニ
賜リ親王ニ屬
賜リ忠勤ヲ致
サシテ忠勤ヲ
給フ

將軍御成敗、存其旨殊可令致忠節、者天氣如此悉之、以狀、

(延元三年)
九月十八日

右中辨花押

(惟時)
阿蘇大宮司殿

三五 征西大將軍宮懷良親王令旨案

追申、東國并諸方官軍已上洛候也、

鎮西恩賞并朝敵退治以下事、爲有其沙汰、已御下著讚州候、則可有御渡海与(懷良親王)州候、且鎮西御船付以下之事、念可被召進故實之仁於与州之由、征西將軍令旨所候也、仍執達如件、

(延元三年)
十二月卅日

(五條賴元)
勘解由次官花押

(惟時)
阿蘇大宮司殿

三六 後村上天皇綸旨案

日向國高知尾三田井入道明覺跡、柴原又三郎入道性虎當知行不可有相違

阿蘇文書

五三七

懷良親王讚岐
ニ下向セラ
九州御渡海ノ
案内者ヲ惟時
ニ求メラル

後村上天皇
原性虎ヲシテ

高知尾ノ三田
井明覺跡ヲ安
堵セシメ給フ

者、天氣如此、悉之以狀、

興國二年四月廿三日

右中辨在御判

懷良親王芝原
性虎ヲ召サル

三七 征西大將軍宮懷良親王令旨案

參御方可致軍忠、今明於馳參者、三田井三郎入道跡可被宛行也者、征西將軍(懷良親王)宮令旨如此、仍執如件、(明覺)

五月八日

(五條賴元)
勘解由次官在御判

芝原又三郎入道館

右一枚也、繪旨ノ裏共ニ云、

於正文者、令所持候、御沙汰之時者、可令持參候、

正平五年十月廿一日

沙彌性虎(花押)

○第三十六號文書ト第三十七號文書トハ、モト一紙ニ注記シタルモノナラン、

三八 某征西大將軍宮懷良親王令旨副狀案

某懷良親王ノ
薩摩御安着ノ
旨ヲ惟時ニ報
ズ

征西將軍宮(懷良親王)今月一日着御薩州津、御渡海無爲、殊以目出度候、就其近日定可

有合戰候、其時相構、可被申後措候、委細之旨、期後信候、恐々謹言、

五月八日

多(花押)

阿蘇大宮司殿到來興國三五廿六、(惟時)

三九 征西大將軍宮懷良親王令旨案

日向國朝敵、可競來薩州之由有其聞、爲事實者、爲後措可被退治日向國者、征西大將軍宮御氣色如此、仍執達如件、(懷良親王)

興國四年十一月八日

勘解由次官(五條賴元)花押

惠良小二郎殿(惟澄)

四〇 惠良惟澄一族等恩賞所望闕所地注文案

註進

官軍等恩賞所望闕所地事

阿蘇文書

惟澄恩賞所望
ノ爲メ闕所ヲ
注進ス

日向ノ朝敵薩
摩へ發向ノ風
說、懷良親王
惟澄ヲシテ日
向ノ賊軍ヲ退
治セシメ給フ

一族ノ分

一族分

- 一、阿蘇大宮司小次郎惟澄申惟時跡本領并新恩地事
- 一、惠良彌三郎惟賢申肥後國朽網郷地頭職、肥後國葦北庄地頭職事
- 一、惠良彌次郎惟永申肥後國伊田郷地頭職、肥後國天草郡大屋野地頭職事
- 一、上嶋彦八郎惟頼申本領肥後國六ヶ庄内石津村地頭職、上嶋郷地頭職并一族等跡事
- 一、草野少輔注記澄筭申筑後國鹽見富郷師匠愛淵跡事草野次郎太郎永久跡事
- 一、菊地九郎武久申肥後國六ヶ庄内小山郷地頭職、同庄内下安永地頭職事
- 一、伊津野右衛門次郎入道唯阿申養父小山越前權守武宗跡本領新恩地事肥後國柏原村地頭職、日向國高知尾庄内上村地頭職事
- 一、白石左衛門次郎道秋申養父豐後國堅田次郎入道跡事
- 一、田尻孫六道綱申本領豐後國早田庄内滿吉名地頭職事
- 一、木山太郎左衛門入道幸蓮申本領肥後國六ヶ庄内木山郷地頭職事

高知尾庄内上村地頭職

他門ノ分

他門分

- 一、子守八郎惟一申肥後國六ヶ庄内青木綱地頭職、同庄内桑原郷地頭職事
- 一、竹崎孫九郎惟貞申肥後國六ヶ庄内布加良郷地頭職事
- 一、坂梨子兵庫助惟孝申薩摩國泉庄地頭職當庄半分事、但於此所者、於八幡宛給四人畢、而二人令成御敵之上者、半分可宛給惟孝之由申之、問、可宛賜半分於惟孝之由申之、
- 一、佐伊津小次郎貞弘申肥後國天草郡本砥嶋地頭職、天草大夫三郎入道跡事
- 一、河内次郎三郎政頼申先日拜領日向國新名庄地頭職祖父之跡事、拜領令旨之由申云々跡事
- 一、長崎三郎次郎義政申本領日向國高知尾庄内長崎村地頭職事
- 右注進如件、長崎村内親父政道跡事
- 一、岩戸小太郎政澄申日向國高知尾庄立宿村舍兄跡事

高知尾庄長崎村

同立宿村

興國七年四月八日

宇治惟澄(裏花押)

進上御奉行所

阿蘇文書

一、立宿孫六政高申御感令旨事

正平二年九月廿日

四一 征西大將軍宮懷良親王令旨案

懷良親王岩河
郷ノ替下シテ
竹崎保地頭職
ヲ甲佐福城寺
ニ寄セラレ

甲佐社上宮福城寺新所日向國岩河郷替竹崎保地頭職事尋闕否以一同之法可有其沙汰者征西大將軍宮御氣色如此仍執達如件

正平二年十月廿二日

(五條賴元)
勘解由次官御判

甲佐福城寺衆徒中

四二 征西大將軍宮懷良親王令旨案

懷良親王鹽見
富高郷ヲ草野
澄算ニ宛行ハ
ル

日向國鹽見富高郷事恩賞御沙汰之時以一同之法可被經御沙汰者依仰執達如件

正平二年十一月九日

(賴元)
勘解由次官判

草野少輔注記房

五條良氏懷良
親王ノ肥後御
下着ヲ惟澄ニ
報ズ

四三 五條良氏書狀案

(懷良親王)
將軍宮著御此境候早々可被馳參之由其沙汰候也恐々謹言

十二月十四日

(五條)
良氏 花押

(惟澄)
惠良小二郎殿 正平二年十二月十六日到來

四四 惠良惟澄軍忠狀

惠良惟澄軍功
ヲ申立ツ
惟澄護良親王
ノ令旨ヲ拜シ
備後鞆ヨリ下
國ス

(端裏書)
惟澄申正三〇〇〇

惟澄軍忠次第記詮要謹言上

寂初元弘三年惟直相共令參上金剛山之處依下賜令旨自備後鞆令下國

蘇郡鞍岡合戰自被疵以來關東先代事者不違言上尊氏謀叛以後筑前國有

智山合戰被疵事二ヶ所(延元元年)同季八月十八日肥後國唐河合戰先懸畢次押寄南

郷城追落一色右馬助入道代三村又次郎其外數十人討取畢次筑後國豐福

原合戰令先懸被切乘馬畢其後當國御方菊池八代之外者大略以令零落之

山崎原ノ戰

刻、惟澄讒率五十余人、延元二年二月廿二日、馳上甲佐嶽、相催一族以下、攻隨
 砥、用小北甲佐堅志田、同三月廿二日、打入豐田庄、追拂地下凶賊等之處、號守
 護代、(少貳)賴尙之家人饗庭小太郎、入道以下、數百騎寄來之間、懸合山崎原、致散々
 合戰、惟澄被切臥乘馬、乍成徒武者、討取小野新左衛門、入道以下、數十人、則攻
 入隈牟田庄之處、(一色賴行)右馬助入道、代三村以下、御領詫磨、數百騎發向之間、同四月
 二日、馳向森崎原、三村入道、竹崎新五郎、平田太郎以下、數多討取之、追渡相嶋
 大渡川、畢、同四月十九日、一色(範氏)少輔入道、下國之時、武重相共馳合犬塚原、致散
 々合戰、一色入道舍弟、(賴行)右馬助入道、其外橋薩摩彌八、國分十郎以下、於當手討
 取畢、同六月、押寄矢部山、追落越前守賴顯代平四郎兵衛、上下數百人討致畢、
 其後馳越南郷城、坂梨子太郎入道、宗喜息男彌五郎、惟長、其外數十人討取畢、
 同七月、落津守城之時、和泉豐後守家人等無殘所討取之、自身被疵事、三ヶ所
 次三條少將家發向守富庄之時、一色水垂入道懸合、致合戰、御方既討負之間、
 惟澄入替、迄入夜攻戰、追散凶徒之時、親類若黨數多手負討死畢、次武重相共
 度々押寄合志城、若黨等數多被疵、夭亡畢、延元三年十月、賴尙率數千騎、攻來

犬塚原ノ戰

甲佐城ノ戰

野尻城ヲ攻陷
 ス
 高知尾ノ一族
 下結ビ小國郷
 ニ出ヅ

南郷城ノ戰

甲佐城之時、惟澄僅以卅余騎懸出城外、或討死或被疵畢、次押寄郡浦、討捕一
 色少輔入道、代田井間三郎畢、其後又攻落南郷城、仁木右馬助、義長、代立田七
 郎、甥立田十郎、生取之、其外數十人討取畢、其後馳向日向塚、追落野尻城、相語
 高知尾一族等、打越小國郷、攻落義長、代官古子次郎、則構城、墾於彼所之刻、玖
 珠日田以下、豐後國人等數百騎、令發向之間、馳向一陣、大友一族、野津宮內卿
 并多武木又五郎、枯杉以下、數百人討取畢、興國元年十二月廿日、小鳥合戰、差
 遣親類若黨等之處、白石治部法橋、討死畢、次市下八郎入道、々惠、相語、惟時一
 族、數十人罷成御敵、楯籠南郷城之間、押寄被城攻戰之刻、爲後措豐後肥後大
 勢寄來之間、馳向中途、致散々合戰、惟澄并舍弟彌三郎、惟賢被疵、二人共被切
 臥乘馬、一族若黨、數多令手負討死、打取御敵數十人、其後落彼城之時、道惠并
 大將坂梨子孫熊丸以下、六十餘人討取畢、同四季、惟時令成御敵之時、惟澄相
 殆御方押取矢部城、同五月、取田口向城之刻、河尻詫磨以下、罷向之間、武光相
 共致合戰畢、其後追落甲佐立早要害、燒拂在家、構城、墾之處、賴尙代官對馬豐
 前次郎并大友野津三郎藏人以下、數百騎攻來之間、度々致合戰、親類若黨令

低用ノ戰

手負討死^(畢)□其後賴尙代饗庭右衛門藏人西郷兵庫允率筑前以下國々軍勢馳越砥用之間致合戰手者等被疵討死畢次阿蘇豐後宰苻勢相共亂入萱野村之間終日致合戰之處及晚引退畢其後賴尙取山崎向城之時武光相共致數々度合戰畢其後馬場三郎宗刑部以下令發向味木庄構城墾之間馳向致合戰內田公藤五米倉又五郎於當手討取畢次賴尙重令下國正平元季壬九月二日攻破守山關所之時自小河城下合令致散々合戰追落馬物具日奈子并高木兄弟弓削丹次以下十餘人討取畢次日追懸大野原迄入夜雖支阿彌陀峯自八代御方不及合戰之間不能合力其後今宮要害之時御方人々相共日々合戰畢次山崎向城安見岡二箇所城御方相共落之了其後御敵忍取種山黑駿城之間此所御方要害後山也可令八代出入斷絕之間不廻時日馳向取向城於米山之處內河縫殿允打越於此境者偏可爲惟澄之計之由依令申令踏之處賴尙一族對馬豐前守筑後孫次郎以下數百騎寄來之時八代御方被追落要害之間竹崎左衛門太郎相共追散彼凶徒數十人被疵云々其後賴尙一色直分八代南北以和談義今宮荒尾二ヶ所御方城迦之畢其後御敵馳越

米山ノ戰

守山ノ戰

小野庄ノ戰

大小ノ合戰數
百度ニ及ブ

小河境篠尾構城墾之間惟澄雖致日々合戰自八代終以無合力者也次惟澄於笠松鞍楠二箇所取向城之刻大友孫次郎率數百騎令發向小野庄構城墾之間馳向致合戰追散凶徒令破却彼城之時一族若黨十餘人手負討死畢其後糠塚布瀬篠尾三ヶ所城落之了次三川城落之同今月十四日馳向六ヶ庄燒拂御敵宅所等畢其外先々守富隈牟田河尻詫磨鹿子木須屋立田山本以下燒拂之連々所致合戰也凡惟澄自最初大小之合戰數百度所討取凶徒數千人其間自身被疵七ヶ所令討死親類若黨百餘人也所詮惟澄立申荒涼軍忠否以誓文有御尋御方之傍輩之日若有爭申仁者可申披者也仍取詮言上如件

正平三季九月 日

○本文書紙繼目毎ニ五條賴元ノ裏花押アリ

四五 惠良惟澄注進關所中指合所領注文案

注進關所内指合所々事

惟澄先ニ注進
セル關所ノ注

阿蘇文書

五四七

一、肥後國分

葦北庄

元弘恩賞宛賜人其内于今相續軍忠輩等在、其外故武重令支配新所、仍當時闕所分、不可及一兩村歟云々、

六ヶ庄本領長講堂御領

於地頭職闕所分、者先度爲新所、宛賜宇土壹岐守高俊了、

赤見村限庄内歟、何庄内村哉、非闕所歟、

天草本砥嶋

兼日申子細之仁、於御方致軍忠、不被尋究者、無左右難致闕所、

一、豊後國早田庄内滿吉名地頭職事

件庄地頭職自關東時、菊池(護良親王)故宮兵部卿殿御相傳之地也、御恩御相續非

闕所歟、

一、薩摩國和泉庄地頭職事

當庄輩自寂初於國致軍忠、無左右不可及沙汰之由、自宮御所被仰者也、(懷良親王)

豊後早田庄滿吉名地頭職、護良親王ノ御領

新名庄ト名付シケラル、地ナ

高知尾ノ一族小野城ニ楯籠ル

一、日向國新名庄國中無此名字歟、若爲新納院者非闕所、

此外注進闕所地事、闕否雖不分明、先爲新所可被宛行也、

一、豊後國朽網郷地頭職於御方、致軍忠之輩等在者也、土貢千五百云々、

一、同國玖珠地頭職於御方、致軍忠之輩等在者也、

一、日向高知尾庄内闕所

高知尾一類籠小野城、可被尋究、

一、堅田次郎入道跡、可注申所領名字也、

○下文闕ク、第四十號ノ文書ト相關聯スルモノナラン、

四六 惠良惟雄書狀

きくちとの、御狀(禁思)の、きんきのをりふしにて候(判形)とに、もんきやうをいせられす候よし申され候、これまての御(心)□つりい悦入候よし申され候、

かしこまて申候、にさうゆとのの、この十七日大(佐井)さいよ入られて候、又(菊)き

池) くちとの、返狀まいらせ候、たよそこれのふまんの、たりの、大にとの
さんせられて候へり、さゝめて御申候らんとおんし候、
(参)

一、とく申入候へとも、たりさぬおの事とも、ちくこへかさねくも
御申も候へ、まゐるへしとおんし候、ちくこの御さゝのたもむきさ
もよくあり候へ、これの事、まさい候へしともおんせす候、
(地下) (沙汰) (名) (主)

一、大さいの事、ちぎのさゝ人まうやまうまかさん上候、御めにかゝるへく
候ところ、あまりにせけんはまり、ふしふるさやうにて候やとに、いま
ゝてさん上せす候、いりさま月あひころのまかまいるへきよて候よし
申候、
(世間) (作法)

一、これのまきひしくととりまづめられ候もんするやうにも候へす候、
御心ゑのさめニ申候、

一、にうけとのこれまはり候へ、やりてくおあまへまいるへく候
ところ、まそらくこれまゐ候て、せけんはやうをもうけ給もるへきよ
し、おほせりふま候やとに、まゐりともまゐり候、かに事もくかさねてお
(仰) (蒙)

高知尾ノ一族
味方ニ來ル

得せりふま候へ、かしこまり入候へく候、
(高知尾)
一、たりちの人の事、見つりれさるよしの申候へとも、まやうしをの、ま
れされもおんちせぬよし、申され候やとに、ふんまやうからす候あいさ、
いまゝて事のやう申入す候、恐惶謹言、
(正平四年カ)
七月十九日
(惠良)
惟雄(花押)

四七 惠良惟澄書狀

此間可申入候之處、彼方此方猶未定候はる間、延引仕候、非本意候、抑向州
事道行候之様、申沙汰候者畏入候、

一、向州高知尾一族等日向山内之人々悉降參御方候了、
(族)

一、惟時間事、無子細候、委細光長大夫將監可被申候、
一、注進申候、以綸旨令旨之趣、申入候事共、道行候者畏入候、
度々申狀雖恐入候、惟澄浮沈候間申入候、道行候にて、無身置所候間申
入候、恐惶謹言、

高知尾ノ一族
等官軍ニ降參
ス

日向古文書集成

(正平四年) 九月十八日

進上 (賴元) 五條殿御内

五五二 筑後權守惟澄(花押)

懷良親王高知尾一族ノ來軍ヲ褒ス

四八 征西大將軍宮懷良親王令旨案

高知尾輩參御方之條、併忠節之至也、殊所被感思食也者、征西大將軍宮御氣色如此、仍執達如件、

正平四年九月廿六日

惠良筑後權守殿

(五條賴元) 勘解由次官花押

後村上天皇惠良惟澄ヲシテ日向吏務職ヲ管領セシメラ

四九 後村上天皇綸旨案

(惟) 維時參御方之由被聞召了、尤以神妙、此上者彌令同心合力、可令廻凶徒對治之籌策、日向國吏務職事、綸旨被遣之、於守護者、如先度被仰、遮仰他人了、存其旨、殊可令致忠節之由、被仰下之狀如件、

(正平四年) 十月五日

左少辨花押

惠良筑後守館

五〇 後村上天皇綸旨案

日向國吏務職可令管領者、天氣如此、悉之以狀、

正平四年十月五日

惠良筑後守館

左少弁花押

惟澄高知尾庄ノ兵ヲ率テ菊池陣ヲ攻陷ス

五一 五條賴元證判惠良惟澄軍忠狀

(端裏書) 阿蘇筑後守惟澄申軍忠事

右惟澄率日向國高知尾庄軍勢等、去十日馳越菊池、同十二日酉剋、押寄凶徒合志能登守幸隆所楯籠之菊池陣城、始合戰、六々日夜致軍功畢、然間當手軍勢八人所被疵也、仍同十七日酉剋、凶徒等令沒落畢、然者賜御證判、爲備將來之龜鏡、恐々言上如件、

正平五年三月廿日

阿蘇文書

五五三

〔證判〕
被聞食了者
〔五條賴元〕
勘解由次官〔花押〕

五二 征西大將軍宮懷良親王令旨案

日向國吏務管領事、綸旨案被經御覽了、早可令施行者、征西大將軍宮御氣色
如此、仍執達如件、

懷良親王後村
上天皇綸旨ニ
任セ惟澄ヲシ
テ日向吏務職
ヲ管領セシメ
ラル

正平五年四月十日

〔五條賴元〕
勘解由次官〔花押〕

〔惟澄〕
惠良筑後守館

五三 五條賴元令旨副狀案

向州吏務事、綸旨案文被經上覽候了、令旨同申沙汰候也、恐々謹言、

〔正平五年〕
四月十日

〔五條〕
賴元〔花押〕

〔惟澄〕
惠良筑後守殿

惟澄高知尾庄
スノ凶徒ヲ追落

五四 征西大將軍宮懷良親王令旨案

發向日向國高知尾庄、對治當庄、追落凶徒之由、被聞食了、忠節之至、殊所被感
思食也者、依將軍宮仰執達如件、

正平五年四月十日

〔五條賴元〕
勘解由次官〔花押〕

〔惟澄〕
惠良筑後守殿

五五 五條賴元令旨副狀案

高知尾庄御對治事、御感令旨申沙汰候也、恐々謹言、

〔正平五年〕
四月十日

〔五條〕
賴元〔花押〕

〔惟澄〕
惠良筑後守殿

五六 大友氏時書狀案

きのふ〔宗禪門カ〕アうせんもん〔見參〕ニけさん候、〔精忠〕アれの志やうち〔誓狀〕の事、御〔奔走〕やん〔走〕アうの
ていかたり申され候、悦喜申〔誓狀〕まかり〔誓狀〕なく候、せい志やう〔誓狀〕をもて、あい〔誓狀〕ふり

阿蘇文書

五五五

大友氏時阿蘇
ル惟時ニ書ヲ遺

いさけいやく申候しあいさ、いよくたのミ申て候、御同心のてうを茂
悦入候、

一、きくちたくミ申候まさい、このへんにふうせつ候、まんようにあさひす

候へとも、かねて御おんち候にて、ときこのおまかんきたるへく候あ

いさ、御心へのためをけるそらのせいゑをもちて申候、せつねきこしめ

し、よくく御ようしんあるへく候、

一、中ふせん(豊前)の事、去七日かせん(合戦)を御方うちりち、まゆこ又さいくわんいけ

むねとの物三十よ人、おうして七十よ人うちとりて候、おのちちくの

人々大望やく御りさくひきて候、やまかあさをいけの人々、たりのこ

かりかうろにて御さあわけ候、まけらの人々もすてこうちいて候よし

きこゑ候、日向の人々くませいあいとにも、やけしろこうち入へきよし

申て候、かやうにまよう同心こうちあち候あいさ、おと候いしとおん

して候、お茂く、これの心中このせいあまを佛申され候へく候、ふしん

れんれんにうけ給候へ、悦入候、恐々謹言、

日向ノ諸士八
代ニ攻入ル

八月十三日

氏時花押

阿蘇大宮司殿到来八月十四日午後、

五七 芝原性虎所領讓文

日向(日向)のくにたかちをのまやうのうち、三さいのかうのちとうまきの事、

性虎たんまやうとまて、くさし(給)のり候といへとも、きやくのきたもて、

ゑらのちくこのかまに、たうかうの内下のむら、大人山内やとのむらたさ

まさん(進)の候、よてまさんまやうし(案文)のあんもんたそへて、まんし候、ゑいさい

をかきま、御ちきやうあるへく候、よてこ日のま免に狀くさんとし、

正平五年十月廿一日

沙彌性虎(花押)

芝原性虎高知
尾庄内ノ地ヲ
惠良惟澄ニ讓

五八 田原政信代官職請文

日向國高知尾庄田原郷四郎次郎忠政知行跡御(代官職)をいくむんまきの事、ゑら

との、御方よりほりあつり候ぬ、いさゝり御さめにてきまのき茂

阿蘇文書

五五七

田原政信高知
尾庄田原郷忠
政知行跡代官
職ヲ惠良氏ヨ
リ預カル

あし、ふちうあるましく候、かきりある御くうしいけの事、せんれいのこと
(不忠)
く申ささすへく候、もし(年真)ふんく御くうした(對捍)い、うんの時、めしはあされ候、
んこ、いき致申ましく候、よて爲後日狀如件、

十月廿七日

惠良殿

田原七郎大神政信(花押)

五九 菊池武光書狀案

高智尾河内次郎四郎申候當時(知行内カ)内知行、少々御代官違亂之由歎申候、仍彼注

文進之候、所申無相違事候者、宜様可有御計候哉、恐々謹言、

三月廿二日

肥後守武光(花押)

謹上 阿蘇大宮司殿

六〇 征西大將軍宮懷良親王令旨案

日向國守護職事、依當國籌策之功、可有其沙汰者、依一品親王御氣色、執達如
(懷良親王)

菊池武光高知
尾庄河内次郎
四郎ノ知行分
達亂チ停メラ
レンコトチ阿
蘇氏ニ請フ

懷良親王日向
守護職ヲ惟武

ルニ宛行ハセラ

件、

文中四年六月十三日

左少將(胤房)花押

阿蘇大宮司殿(惟武)

六一 征西大將軍宮懷良親王令旨案

日向國々司職事、任先年令旨可令執務者、一品式部卿親王御氣色所候也、仍
(懷良親王)

執達如件、

文中四年六月十三日

左少將(胤房)花押

阿蘇大宮司殿(惟武)

六二 征西大將軍宮良成親王令旨案

日向國々衛事、任先度御沙汰之旨、不可有相違之由、依仰執達如件、
(良成親王)

元中三年五月廿六日

散位 花押

阿蘇大宮司殿(惟政)

阿蘇文書

五五九

良成親王惟政
ヲシテ日向國
衛ヲ安堵セシ
メ給フ

惟武ヲシテ日
向國司職ヲ安
堵セシメ給フ

六三 征西大將軍宮良成親王令旨案

九州再興事、所被憑思食也、此時分舉義兵者、豊後日向兩國守護職并肥後國八代庄河尻一跡、三船一跡、海東一跡并豊田庄等事、可被知行之由、依征西大將軍宮仰、執達如件、

元中十年二月九日

左中將花押

阿蘇大宮司殿

六四 足利義滿内書

日向國事、爲隣國之上者、菊池肥(武朝)後守相共、合力令河越(氏兼)後守候者、可目出也、

三月二日

阿蘇太宮司殿

六五 河内政歲等十六名連署契狀案

義滿阿蘇惟村
菊池肥後守
朝ト共ニ今河
氏兼ニ協力シ
テ日向ニ出兵
セシム

良成親王惟政
ノ義兵ヲ擧ゲ
ンコトヲ促シ
給フ

阿蘇氏家臣等
一同主家ニ誓
約ス

再拜々々天罰起請文事
右元者、

- 一、惟秀、惟治之外上と憑申ましく候事
- 一、阿蘇之三殿對申、二心野心之儀を存申ましく候、去巳□□□番御恩以身上安穩ニ候之間、順逆上意を背申ましく候事
- 一、惟利之子息牛德殿、又童殿ニ、前よも音信便不申候、於以後も許容申ましく候、殊ニ馬原石部新衛門、其外當所之落人見合ニ可致沙汰候、又何方よも罷越候と承候ハ、則申上可致忠節事

若此條々僞申候者、

神文熊野牛王也、

奉請上者、梵天帝尺、下者堅牢地神、内海外龍王龍主、特日本鎮守伊勢天照太神、王城鎮護諸大明神、松尾平野大明神、別者當所擁護十社大明神、祖母宮王子八幡大菩薩、惣而當所八十八社御部類眷屬神罰冥罰身上可蒙罷候、仍起請文如件、

文明十三年辛丑七月五日

三田井惟房

河内飛驒守政歲花押

三田井七郎二郎惟房同

向山豐後守惟豐同

向山彈正忠惟實同

鹽市紀伊介惟貴同

安徳大和守惟次同

向山伊豆守經豐同

山崎能登守惟種同

柴原三河守惟宅同

向山清衛門胤豐同

向山二郎惟滿同

向山左衛門惟幸同

向山太郎二郎惟清同

柴原又三郎秀幸同

左藤山城守秀次同

同子肥後守秀安同

六六 伊東尹祐書狀案

日向伊東殿

家風干戈無靜謐候哉、依其堺御滞留、預音書候、快然之至候、當時方角武略察存候、余者彼使僧の申候條、省略候、恐々謹言、

十月八日

阿蘇殿

尹祐在判

伊東尹祐阿蘇
惟乘ノ來狀ニ
答フ

六七 伊東氏年寄稻津重昌等連署狀案

伊東殿老中衆

去月十三日、(村山)惟貞の御對面、諸事被任尊意候條、御音信、誠千秋万歳被存候、彌豐州の御深甚可被仰談事肝要候、以此辻旁可得御意候、恐々謹言、

伊東氏年寄稻
津重昌等小陣
上總介ノ來狀
ニ答フ

阿蘇文書

五六三

八月廿三日

落合河内守 兼代
稻津修理亮 重昌

小陣上總介殿

六八 三田井親貞書狀案

三田井親貞年
賀ノ禮物ヲ阿
蘇惟將ニ呈ス

高知尾三田井殿書狀
年首之御慶詞万歳々漸申事舊候畢、抑爲此等之御祝儀、用嘉禮候條、御太刀
一腰并一種令進覽候、尙永春中可得御意候、恐々謹言、

二月四日

(三田井)
親貞

(惟將)
阿蘇殿 御宿所

六九 阿蘇惟政書狀案

惟將親貞ニ答
フ

改年之吉賀重疊候、抑爲此等之儀、太刀一腰送給候、御丁寧之至候、從是も同
表禮儀計候、猶永日中可申候、恐々謹言、

二月 日

惟將

(親貞)
三田井殿

進之候

七〇 阿蘇惟將書狀案

大友宗麟ノ兵
島津義久ト戦
ハントシテ出
陣ス

薩州江豐州衆爲出勢豊田迄在陣砌被仰遣候、
就下三ヶ國行之儀出張之由候、御辛勞之至候、度々如申候、此表相應ニ馳走
之段不可有油斷候、仍中紙五束進之候、表祝儀計候、何様節々可申談候旨、彼
使僧可申候、恐々謹言、

(天正六年)
十一月十三日

惟將

(道益)
志賀殿
(宗歴)
朽網殿

相良文書

七一 九州探題北條政顯下知狀

肥後國人吉庄南方地頭相良六郎三郎入道蓮道代道心申日向國穗北鄉
(長氏)
 地頭代心生拘(借)惜所從了信法師事

右如道心所進了信狀者借用錢六貫文不致弁者可被進退服仕之由所見也、
 仍召仕之處去延慶二年逃失之間相尋之處居住當鄉之上者可糾給之旨依
 訴申度度尋下之刻如請文者不居住領內所詮企參上可明申云々而現在之
 由道心捧申狀之間仰伊東藤內左衛門尉祐廣益戶四郎左衛門尉行直尋問
 實否處如行直執進今年二月九日心生重請文者可被行奏事不實罪科之旨
 雖載之于今不參對之條不遁違背之咎然則於件了信法師者可召渡蓮道也
 者仍下知如件、

正和二年八月四日

前上總介(北條政顯)平朝臣(花押)

九州探題北條政顯肥後國人吉庄南方地頭相良六郎三郎入道蓮道代道心申日向國穗北鄉
 任長穗北鄉地頭代心生拘惜所從了信法師事

足利尊氏相良
 定賴ヲシテ肝
 付兼重等チ攻
 メシム

七二 足利尊氏軍勢催促狀案

(端裏書)
御教書案

(足利尊氏)
御判

謀反人肝付八郎兼重(兼隆)同彦太郎以下凶徒等事相催一族并國中地頭御家人
 及名主庄官不廻時尅令討伐可馳參之狀如件、

建武三年二月四日

相良(定賴)兵庫允殿

七三 相良定賴申狀案

六郎(三郎入道蓮道カ)謹言上

肥後國球磨郡人吉庄地頭相良兵庫允定賴謹言上、
且依抽
 欲早參最前御方致度々軍忠上者預御注進且令拜領將軍家御下文備將
 來龜鏡彌成弓箭勇本領當庄北方半分地頭職事、

相良文書

五六七

相良定賴九州
 探題一色範氏
 二上申シテ京都
 二執申シテ吉本
 領及ビ人吉庄
 北方半分地頭
 職安堵ノ尊氏

副進

- 二通 將軍家御教書建武二年十一月二日
僅一族可參御方由事
- 一通 宰府御施行同年十二月廿二日
- 一通 同御覆勘狀同三年二月七日
- 一通 生虜飯尾五郎兵衛入道請取同年二月十日
- 一卷 着到同年三月八日
- 三通 一色殿御感御教書(範氏)
- 一通 御感御教書建武四年正月廿日
- 一通 小府御感御教書(少貳賴尙)
- 一通 一色殿御下文建武四年二月七日
- 一通 入吉庄本御下文案元久二年七月廿五日

眞幸院ノ戰

右定賴任御教書并御施行之旨、最前參于御方、以去々年建武三正月六日、追押落菊池肥後守代官荒木左衛門次郎住宅、則追落之訖、同十日馳越眞幸院致合戰、刻生虜肘付八郎兼重親類飯尾五郎兵衛入道以來、度々令致軍忠之條、

御感御教書以下覆勘狀等明白也、次將軍鎮西御下向之時、軍勢等大略雖揮二心、於定賴者爲御方致忠勤之間、依永吉平六入道宗昌注進、忝下賜將軍家御判於着到之裏畢、次御上洛之時、爲供奉橋佐渡彌八公好同心、以建武三年四月廿日罷立球磨郡、同廿二日於八代庄、對于內河彦三郎致合戰之刻、親類若黨等數輩或被討或被疵間、公好則令注進畢、就中相良孫三郎經賴、須惠、永里、岡本、奥野、橋佐渡八郎以下凶徒等、令同心于武敏(菊池)兼重、內河等打取當郡、搆城柳於郡內、引入鎮西凶徒等、相從近國、疑令蜂起之間、定賴自最前每度致軍忠之上者、捨命今更雖不能言上存御方之條、勿論也、爰凶徒者大勢也、定賴僅雖爲小勢、相分子二手、籠置親類若黨等於山田城、致散々防戰、定賴者則押寄于後卷、如元追籠凶賊於木枝城畢、是併云奉爲上方、依爲少府御領也、軍忠爭可被順于余人哉、凡至于當郡者、爲無雙城柳之間、爲凶徒等於被打取者、輒依難被退治、如此所令致度々忠勤也、仍郡內靜謐之條、偏可謂鎮西第一軍忠者哉、此等次第依達于上聞、連々非管預御感御教書、自一色殿返給本領北方半分地頭職畢、御分國闕所事、雖爲御計、且依無二忠功、且任由緒之旨、預御注進之條、併可爲御

芳志、將又爲御分國平均法之上者、爲恩賞不足分、一族經賴并庶子等跡預給之、彌抽忠節、爲成向後之勇、粗言上如件、

建武五年八月 日

七四 足利氏所領吉田村代官僧覺英代注進狀

開田出羽守殿御領吉田村康永四年郷々御年貢被濫妨子細條々事書
一、去九月三日吉田村沙汰人覺仏申候様ハ、馬關田より可濫妨之由承候、若殿原を少々被差置候、百姓を守護候へりしと申候之間、兵部房覺英一族坂大進房、別苜兵衛三郎、曾木又四郎、小山田六郎若黨加藤三郎、河野二郎四郎中間五郎二郎、彌七以下數十人差遣吉田候之處、馬關田庄預所平河又三郎師里、眞幸院收納使北原助六兼命、同西郷公文野口平次郎重義、吉田飯野名々主花北左衛門太郎入道等率大勢、九月六日押寄吉田村令致害彼等、至于田畠作毛者、皆以令苜取之間、爲令言上候、坂兵部房覺英同十六日上洛仕候之處、敵方物共差遣惡黨、路次備後國めをとさやと申宿よ

吉田村沙汰人
覺佛援チ一族
等ニ請フ

馬關田庄預所
平河師里眞幸
院收納使北原
兼命等吉田村
スニ入リテ濫妨

畠山義顯日向
守職ヲ與ヘ
ラル

細川賴有同職
ヲ辭退ス
義顯水田殿方
ヲ押領ス
田島治部房之
ヲ支フ

義顯坂一族ヲ
攻ム

て依令致害候、下人そりり十一月十日逆下候之間、此子細爲申入候、重進上脚力候、今年夏物少分收納候ニ、京都御大事を存候、用途少々取違之、持參仕候之處、爲惡黨悉被取了、

一、日向國大將畠山修理亮殿、今年始天當國守護職御拜領之處ニ、眞幸院東郷内永田殿方百町ハ、細河刑部大輔殿、先帝御代於馬場殿、御所の十を令獻給候動功ニ將軍家より御給アリ、其後守護職を又御給あり、雖然無守護領之間御上表了、爲無主國之處、爲薩州凶徒對治發向新足、畠山殿御拜領之刻、混守護職、永田殿方を畠山殿可有御知行之由仰よて被入御使畢、一、永田殿方本給主ハ田嶋治部房ト申天、眞幸院所生ノ人也、坂太郎左衛門入道周覺とて覺英從父兄弟ニて候者、依有所縁地頭代職を多年被申誂、知行仕者也、而ニ非守護領候之由、依支申候、奇恠之由、畠山殿仰よて御内祇候人士持新兵衛尉宣榮を大將として、眞幸給主代并兼命、師里、重義等ニ被成御教書候、被取向城、坂一族居所稻荷城被責候之間、於坂一族者、自最初御方として致軍忠、坂四郎兵衛入道圓覺以下親類若黨若干討死仕

義顯眞幸院六
分一頭代官
職チ部下ニ與

馬關田庄ハ菅
原氏長者ノ所
領

平河師里之ヲ
押領ス

候、致合戰忠候之間、御感御教書を給候、預御注進於京都、恩賞訴訟を仕候
 ニ、永田藤方事を一旦儀を申て候へんとて、御敵与同之由蒙仰候、全無其
 儀之由依進起請文、於合戰者雖被閣之、至于向城者未被破却之、
 一、寄事於左右、梶原殿御領眞幸六分一、年來地頭代職を覺英持て候、
 島山殿より收納使助六ニ給候了、吉田を公文平二郎、平河又三郎二人
 ニ給候て、地頭手作、百姓作以下悉被蒞取候了、
 一、明年分を替面請まいらせ候へんと巧申候、
 一、吉田ト馬關田まぐわとは堺並にて候、彼庄ハ天神御領北野長者殿所領也、而平
 河宮内左衛門入道觀覺ト申物請所として、先年知行仕候しを、觀覺令他
 界候て後、甥にて候又三郎師里相續仕候て、動亂以後十餘年不弁乃貢候
 之間、使を下候へり、打死候て、押領仕て候り、吉田内を用水溝ニ掘候て、田
 を作事候、其年貢ニ錢五百文、鞆一具、往古吉田へ致沙汰候を、一向打出候、
 其上狩倉三ヶ所押領之、吉田山ニ入候、吉田百姓を、馬關田ノ所備とを
 り候を、よき鈍をとりて、足手を備やとわさと申て、わつらひし候程ニ、無

西郷ノ公文重
義ハ西郷ノ一
分地頭職飯岡
氏ノ代官

眞幸院收納使
ハ吉田ノ收納
使ヲ兼ヌ

吉田ノ戦

力せめつりこれ候、如此事ニ度々及鬭諍事共候之間、覺英を敵申候ニよ
 て、か様事出來候、
 一、西郷公文重義ハ、西郷一分飯岡殿代官にて候、是も用水事と申、堺相論事
 と申、古敵當敵にて候、如此敵方吉田御領を替面、御代官職を給候者、向後
 御所務可爲難治候、
 一、眞幸收納使ハ、吉田をも持て候り、吉田ニ領家名一名候也、而ニ地頭代
 を致害仕候之上者、向後可被收公彼名候、其旨を可有御存知候也、
 一、吉田地頭御代官をうちおろして候事を、依大將之仰うちたるよし、敵
 方者共陳申候へんと申候なる、依永田藤方支申候、御敵与同之由候て、可
 取向城之由、土持宣榮方ニ薩州陣頭より被成御教書候事ハ、九月五日、宣
 榮之許日向大塙ニ到來ハ、九月九日、同廿八日眞幸へ入部候、吉田合戦ハ九月
 六日にて候、全非大將御計候、以古敵當敵宿意与當村競望之者令致害候、
 覺英をも路次透て討取て候、若干作毛を蒞取候、御領を荒所ニ成
 候と申、覺英以下を致害仕候と申、罪科不輕候、於公方被經御訴訟候て、召

上彼等被召今年御年貢候、覺英り敵をも罪科ニ申行を給候て給候ハ、
可然候、

土持ノ一族
伊東ノ一族

一、御教書を申あさせ給候ハ、日向國ニハ、土持一族ニハ、土
持兵衛尉、鹽見左衛門太郎、北谷兵衛尉ニテ候ヘク候、伊東一族ニハ、木脇八
郎ト田嶋又二郎ト申人にて候ヘク候、他國ニテ候ヘとも、近隣ニテ候マ
ハ、肥後國相良孫三郎經頼、須惠彦三郎、山田次郎是等ニテ候ヘク候、

一、吉田を請申候ハ、んと申候モ、うきよと被仰出候て、錢貨持參仕て候ハ
ん時、今年濫妨、苅田分ニ被召置候由仰候て、可被召之候、誠ニ御代官職を
彼等ニ給候モ、御領を他領ニ引入候ハ、ん事難儀候、

京都へ申シ内
人チ下シテ除
顯ノ違亂チ義
カント欲スレ
ドモ時日ヲ要
スルヲ以テ頓
野代官方ヨリ
圓日房ヲ申下
ス

一、御内人を忿下給候て、大將違亂をも申のき候、面形ニして、可所務仕候、京
都より被仰候マてハ、ん事あり候ハ、んするあひ、とんの、御代官の御
方へ申候て、圓日御房を申下候ところニ、敵入方ニとめられ給候て、是
ハ、んをハ、んし、候ハ、んす候、敵方物ニすりされさせ給候て、いりやうハ、ん事
をり御注進候ハ、んすらん、おれをハ、ん御心えあるヘク候、

覺寶存生ノ上
ハ、ん年貢ハ、ん無沙
汰セザルベシ

御領ノ違亂ハ
飯野ノ名主花
北某ノ企ニ出
ヅ

召文ノ御教書
ヲ下スベシ

一、此御領ゆゑ、一族若黨十餘人被討候了、爲申入候上洛仕候之處、(覺英)我身又
被討候了、不一方候宿意歎にて候ニ、御代官職ニハ、敵人ニもされて候モ
ん事ハ、生前歎マて候、覺英こそ他界仕て候とモ、後家親類子共跡ニ候ヘ
ハ、於御年貢者、如先々不可有相違候、若又跡ニ持候ハ、ん事可爲難儀候者、
太郎右衛門入道覺寶未存生仕て候ヘハ、至于御年貢者、不可有無沙汰之
儀候、仍此脚力ハ、覺寶ヨリハ、ん候、明年分ハ、御内より人を給候て、面形と
して可致所務候、

一、御領をか様ニおし候事ハ、飯野名々主花北ハ、ん結構ニテ候、可召放名田之
由、可被下御狀候、

一、吉田領家名事同前候、兩方共御得分可出來候、

一、猶々爲向後、不被經御沙汰候者、見こ、候人あるマシク候、召文御教書を
とく、申付させ給候ヘク候、初度をハ、ん御留候て、二度の御使、御教書之
時、一度ニ國ヘハ、ん下給候ヘク候、

一、彼等ハ、御代官職を給候ハ、ん事をハ、んあふましく候よし申候ハ、敵方にて

内人下シテ
知行スベシ

候へり、申候とのををしめさるましく候、御領のふめあしく候へく候、せめて是こあつり候ましく候、御内より人をくさしまいらせさせ給候て、御知行候へく候、

一、今年御領押妨事、急速に可有御訴訟候、訴状に御年貢を代官覺英持上候を、被奪取候之由、可被載之候、

一、備後にて覺英被討候事、備後守護代之許に師里一族平河彌三郎、(豊島)の左衛門四郎と申物の候ところへ、人を上候て、覺英をはうちて候、か

様事のかひくしき代官をまいらせ候て、可申入候之處に、覺英親類若黨吉田にて悉被討候了、國事も未落居候、脚力よりを進候之間、

事書を進上候、能く御覽し御心得候て、可有申御沙汰候、

一、梶原左衛門五郎殿御領東郷六分一同被押領候之間、御内一所御事候、御訴訟候者、可有御談合候、梶原殿へも注進申上候也、

康永二年十一月廿二日

覺脚力ヲ以
テ吉田村ノ事
ヲ京都ニ注進
ス

税所宗圓足利
尊氏ニ軍功ヲ
注進シテ恩賞
ヲ請フ

七五 税所宗圓申状案

(端裏書)
京都注進状案 ちうるんのふん

肥後國球磨郡入吉庄一分地頭税所新兵衛入道宗圓謹言上

欲早軍忠拔群上者、被經御注進、浴恩賞、彌成弓箭勇子細事

副進

二通 (少貳頼尙) 宰府御感御奉書 曆應三年正月十七日 康永元年十月六日

一通 御教書案 曆應三年十二月六日

二通 筑後彦次郎經尙一見狀 曆應三年八月廿八日 康永元年九月廿九日

二通 一色殿御教書 曆應三年七月十一日 康永元年十月十六日

右宗圓、任御施行之旨、最前馳參御方、建武三年正月六日、押寄于菊池武重代官荒木左衛門次郎住宅、則追落後、同日馳越日向國眞幸院、寄肝付八郎兼重与黨城致合戰之忠、追落彼城以來、令致數々度軍忠之條、御感御教書以下御覆勘狀明白也、次將軍家御下向之時者、諸軍勢等多以雖挿二心、於宗圓者、爲御方致忠勤之間、此等子細永吉庄御代官新御領平六入道宗昌依令注進、

眞幸院ノ戦

宗圓山田城ニ防戦ス

日向古文書集成
五七八
忝下給將軍家御判於彼狀之裏畢、次御上路之時、爲供奉、橋佐渡彌八公好相共、同年四月廿日打立球磨郡、同廿二日於八代庄、對於内河彦三郎致合戰之刻、自身被疵之間、則公好令注進畢、就中相良孫三郎經賴、須惠岡本、奥野橋佐渡八郎以下凶徒等、令同心武敏、兼重、祐廣、内河等、打取當郡、搆城墾、引入鎮西凶徒等、擬相從近國之間、宗圓一族相共楯籠山田城、致防戰之忠畢、是併爲奉上、并爲令全宰府御領也、軍忠爭可被順、余人哉、凡至當郡者、爲無雙城墾之間、凶徒等令打取之者、輒依難被退治、如此捨身命、抽每度軍忠者也、爰曆應三年以來、相良縫殿允祐長罷成朝敵之後、於所々致合戰之忠、自身被疵之條、御教書并御一見狀、歷然也、仍郡内靜謐之條、偏宗圓可謂無二之軍忠者、毀、然、早急速被經御沙汰、浴恩賞、彌爲致忠勤、言上如件、

康永四年十一月 日

七六 足利直冬地頭職宛行下文

下 伊東八郎左衛門尉祐胤

足利直冬北郷地頭職ヲ伊東

祐胤ニ宛行フ

可令早領知日向國飢肥郡北郷田（朝房）上槽左馬助跡、并須賀壹岐前司跡、味原九郎法（清秀）民部丞跡、安富（行）近大夫將監跡、右地頭職事、定三百町、

觀應二年十月廿一日

源朝臣（花押）

七七 九州探題一色範氏施行感狀案

肥後國球磨郡、日向國眞幸院凶徒退治事、去今兩年度々合戰若黨等討死之由、少輔孫三郎所注申也、忠節尤神妙、仍執達如件、

文和二年十二月十三日

相良孫次郎殿

沙彌御判

一色範氏相良定長ノ軍功ヲ褒ス

七八 一色範氏施行感狀

肥後國球磨郡、日向國眞幸院凶徒退治事、去今兩年度々合戰若黨等被疵之

相良文書

由少輔孫三郎所注申也、忠節尤神妙、仍執達如件、

(一色範氏)
沙彌(花押)

文和二年十二月十三日

相良六郎三郎殿

七九 一色範氏施行感狀

肥後國球磨郡、日向國眞幸院凶徒退治事、去今兩年度々合戰、若黨等被疵由、少輔孫三郎所注申也、忠節尤神妙、仍執達如件、

(一色範氏)
沙彌(花押)

文和二年十二月十三日

(朝氏力)
相良三郎二郎殿

相良朝氏

八〇 一色範氏施行感狀

肥後國球磨郡、日向國眞幸院凶徒退治事、去今兩年度々合戰、被疵之由、少輔孫三郎所注申也、忠節尤神妙、仍執達如件、

(一色範氏)
沙彌(花押)

文和二年十二月十三日

野口孫三郎

野口孫三郎殿

八一 足利尊氏地頭職宛行狀

(足利尊氏)
(花押)

日向國三侯院南方內地肆拾町地頭職事、爲勳功地不足并後日之忠、所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

(一色範氏)
沙彌(花押)

文和四年四月五日

(定長)
相良孫次郎殿

八二 一色範氏施行地頭職宛行狀案

(地不脱力)

日向國玖仁院內地參拾町地頭職事、爲勳功之賞、足并後日之忠、所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

(一色範氏)
沙彌(御判)

文和四年四月五日

(定長)
相良孫次郎殿

相良文書

五八一

一色範氏相良
定長三侯院
內地頭職チ勳
功ノ賞トシテ
宛行フ

一色範氏相良
定長仁院
內地頭職チ勳
功ノ賞トシテ
宛行フ

○本文書、足利尊氏ノ袖判ヲ脱スルカ、

八三 足利尊氏地頭職宛行狀

(足利尊氏)
(花押)

肥後國球磨郡久米郷東方橋遠江入道跡田地貳拾町、日向國三俣院南方田地參拾町地頭職事爲討死之賞所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

文和四年四月五日

相良式部丞跡

(一色範氏)
沙彌(花押)

範氏相良式部丞ノ遺族ニシテ、討死ノ賞トシテ、久米郷並ニ三俣院内ノ地頭職ヲ宛行フ

八四 相良定頼并一族等所領注文

(端裏書)
一色殿御下文目錄

相良遠江守定頼、同庶(子方)□等、爲一色殿御配分令拜領所領等注文

相良定頼并一族ノ一色範氏ヨリ宛行ハレタル所領ノ目錄

相良六郎三郎入道分(長氏)、定頼之祖父、此所者本領内也、而先代之時被收公當御代申賜畢、

一所 肥後國球磨郡人吉庄北方半(五十町)分、此所者、定頼相續御配分狀之間、一圓可拜領仕候、

相良遠江守分

島津北郷同辨分

一所 肥後國球磨郡永吉庄半(百七十五町)分、(平)河左近(朝房)頼尙跡

一所 日向國嶋津庄北郷(百六十町)、加弁分定 上杉左馬助殿跡

一所 肥後國球磨郡人吉庄北方半(田數土貢同前)分、

一所 日向國眞幸院内田地(百五十石)、上杉左馬助殿跡

一所 肥後國球磨郡久米郷西方上村(三十五町)、三池兵庫助妻女跡

一所 日向國飢肥北郷弁分、同國嶋津庄北郷弁分

同六郎分今者出家、

一所 肥後國球磨郡久米郷西方下村田地拾町三十石、三池兵庫助跡

一所 日向國三俣院内南方田地肆拾町

同孫次郎分(定長)

一所 肥後國球磨郡久米郷西方下村内田地拾五町三池兵庫助跡

一所 日向國三俣院南方内田地肆拾町

同孫四郎分今者出家、

眞幸院内

飢肥北郷辨分
島津北郷辨分

三俣院南方

北郷南方

- 一所 肥後國球磨郡久米郷西方下村内田地拾町同跡
- 一所 日向國北郷南方内田地拾五町上杉香松丸跡除先給
- 一所 同國三俣院南方内田地貳拾町
- 同左京亮分
- 一所 日向國三俣院南方内田地伍拾町
- 同彦三郎分
- 一所 同國同院田地參拾町
- 同彦四郎分
- 一所 同國同院田地拾五町
- 同一族等討死分
- 同式部丞跡
- 一所 肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地貳拾町
- 一所 日向國三俣院南方内田地參拾町
- 同木工左衛門尉跡

三俣院内

財部郷内

- 一所 肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地貳拾五町
- 一所 日向國財部郷田地貳拾五町
- 同中務丞跡
- 一所 肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地拾五町
- 一所 日向國三俣院南方内田地貳拾五町
- 同新三郎跡
- 一所 肥後國球磨郡久米郷東方橘遠江入道跡田地拾五町
- 一所 日向國財部郷田地拾五町
- 須惠彦四郎跡
- 一所 肥後國球磨郡須惠庄三分壹田地肆拾五町
- 平河又三郎分
- 一所 日向國真幸院引田貳拾町賴尙跡
- 一所 同國三俣院南方内田地伍拾町
- 木野太郎左衛門尉分今者出家

真幸院引田

眞幸院西郷

- 一所 肥後國球磨郡久米郷西方下村田地拾町三池兵庫助跡
- 一所 日向國三俣院南方内田地拾五町
- 岡本又次郎分
- 一所 肥後國合志郡内高永田地拾五町永里彦次郎跡加庶子
- 一所 同國球磨郡永里村同跡
- 牧伯耆左衛門四郎分
- 一所 同國球磨郡久米郷西方下村田地拾町三池兵庫助跡
- 一所 日向國三俣院南方内田地貳拾柒町、肥後國高橋郷内早瀬小中嶋田地參町
- 野口平次入道分
- 一所 日向國嶋津庄北郷内田地貳拾町、同國眞幸院西郷内田地柒拾五町齋藤十郎分
- 一所 肥後國隈庄内有安名田地伍町佐伯六郎左衛門尉跡
- 一所 肥前國佐賀郡内田地伍町安徳古河小太郎跡、同郡田地伍町安徳虎丸跡、同國大田

三俣院南方

- 庄内田地伍町牟田部眞如房跡
- 一所 筑前國穂波郡内大豆田村田地貳拾伍町武藤大豆田小五郎跡、同郡内河津村田地貳拾伍町河津三郎太郎跡、湯温浦四郎次郎分
- 一所 肥後國葦北庄内湯浦田地貳拾町
- 山田左衛門次郎分
- 一所 肥後國八王寺庄内大崎太郎跡田地參拾町、同國六箇庄内福富上野彦三郎入道跡田地五町、同國上嶋彦八跡田地五町、同國鹿子木東庄内弘生又三郎跡龜井田地五町、筑前國長淵庄内秋山源八跡田地五町
- 一所 同國江田村田地貳拾町江田太郎跡
- 平河小三郎分
- 一所 日向國三俣院南方内田地拾五町
- 稅所孫兵衛尉分

一所 同國三保院南方内田地拾五町

稗田了仙房分

一所 同國眞幸院西郷吉田村田地拾町畠地山野可
依田數

右任正文之旨、注文注進如件、

八五 畠山義顯施行兵糧料所宛行狀

日向國北郷領家職事、爲兵糧料所々預置也、任先例致沙汰、可被抽軍忠、仍執達如件、

延文四年十一月十四日

(畠山義顯)
治部大輔(花押)

(定頼)
相良遠江守殿

八六 一色範親兵糧料所宛行狀

日向國々富庄北加納郷參分壹地頭職事、爲兵糧料所々預置也、守先例可被致沙汰之狀如件、

畠山義顯北郷領家職事、爲兵糧料所々預置也、任先例致沙汰、可被抽軍忠、仍執達如件、

一色範親國富庄北加納郷參分壹地頭職事、爲兵糧料所々預置也、守先例可被致沙汰之狀如件、

ニ預ク

延文五年十一月十三日

(一色範親)
刑部少輔(花押)

相良孫五郎殿

八七 一色範親兵糧料所宛行狀

日向國飢肥北郷山東本政所方四分一、地頭職事、爲兵糧料所々預置也、任先例致沙汰、彌可致忠節之狀如件、

康安二年八月廿七日

(一色範親)
刑部少輔(花押)

相良孫五郎殿

八八 一色範親兵糧料所宛行狀

日向國飢肥郷内山西星倉方半分、地頭職事、爲兵糧料所々預置也、任先例致沙汰、彌可致忠節之狀如件、

康安二年八月廿七日

(一色範親)
刑部少輔(花押)

相良豊前々司殿

飢肥郷内山西星倉方半分、地頭職事、爲兵糧料所々預置也、任先例致沙汰、彌可致忠節之狀如件、

飢肥北郷山東本政所方四分一、地頭職事、爲兵糧料所々預置也、守先例可被致沙汰之狀如件、

相良豊前々司

相良文書

五八九

八九 島津貞久書狀

〔上書〕
相良兵庫助殿

道鑒

馳越日向國眞幸院、追落島山修理亮直顯代官後藤新左衛門尉并和田又次郎等、楯籠田上城、取誘同院稻荷城、籠彼城、被致忠節候次第、注進狀委細披見候訖、尤目出度候、以此趣、急速可申注進京都并鎮西候、恐々謹言、

六月九日

〔島津貞久〕
道鑒〔花押〕

〔定賴〕
相良兵庫助殿

定賴島山義顯
ノ代官等ヲ眞
幸院ニ破ル
田上城
稻荷城
眞久定賴ノ軍
忠ヲ京都并ニ
九州探題ニ注
進スベキヲ告
グ

九〇 相良前賴同氏賴連署契狀

契狀

右〔定賴〕おやにて候もの、時も、一そく壹ちにむけさてまつり候て、そきを存〔疎儀〕せられ候し程〔所存〕二めんく御志よそんもとうへん候き、前賴又そのむきを存へく候あいさ、〔契〕象い狀までもあるましく候へとを、いまれ世上

前賴氏賴ソノ
一族ニ連署ノ
契狀ヲ與フ

のてい、昨日は象ふのかはるさ〔作法〕やうに候、庄内〔不慮〕もおいても、ふりよれ〔不慮〕きく

ミをなま仁もあるへく候あいさ、如此りさく申ささめ候あり、志よせん

一そくの包つらひ〔荒説〕もかり候いんするともりらにおいては、親子兄弟を

いひな、なりをきりふへく候、

一、一そくのかりよ、ふりよのく〔辯酌〕包うをついてきさり候時の、志んしやくの

儀〔相論〕おく、あひきりひ〔相論〕も申〔相論〕むらくへく候、

一、庄内〔條々〕において、所務以下のさ〔條々〕うらん〔條々〕もおよふ事候時の、一そくおの

申せんし候て、〔理運〕まうん〔理運〕よまりせてさいそく申へく候、かやうにてう

申ささめ候うへ、〔向後〕きやう〔向後〕こういよく、一味同心のおもひをなまへく

候、もしこのてうく、偽申候へ、

八まん大やさつ比御そつをまかりかうふるへく候、仍契狀如件、

正平廿三年八月五日

〔相良〕
藤原氏 賴〔花押〕
〔相良〕
近江守前賴〔花押〕

かりとミとの

申候由承候と申候、尙々此堺之事、吉田指向之當作ると散し候りて、
 候間、一兩日之内に可勢遣候、其隙明候者、依御返事其方へ可參候、少も無沙
 汰に候て在所に候よて、いさつら候、御親類様各々、御辛勞候處(名和顯忠)、いさつら
 候する事、存知之前に候、由斷と、被思召ましく候、又伯耆殿より申被遣
 候、祐國之事、計策申候へりし、可然候すらんと被申候間、其まで進狀候、彼方
 へ可有御遣候、内儀之分も、我りもとへ當て、遣候へと被申候間、伯州へ遣
 候狀よて候、尙々山野之事、番衆入候、ぬしうら、修理亮又、彈正殿
 傍に可被居候哉、不可有御由斷候、又祐國に、其様よりも御計策、可然由被
 申遣候、慶事、恐々謹言、

(文明八年)
 八月廿二日

季久(花押)

相良殿

九四 相良長歡丸目長將連署書狀

追而うへもしひかしへ御あ□□の事、働きとに候、あひのひ可申

相良義滋ノ臣
 相良長歡丸目

長將返書ヲ伊
 東義祐ノ臣園
 田刑部少輔出
 浦安藝守ニ遣
 リテ出兵ノコ
 トヲ協議ス

候、將又、於眞幸、肝付方以越山、此方和解之儀、調法候、北原方、納得之由
 候、雖然、伊東方、新納方、無入魂候て、如何候條、可被相談之由、候世上之
 轉返(變)、おろしく候、早々御返事可申候處、九日兵庫頭あせちのことく罷
 のかり候て、夕歸宅候間、此分は候、長種(上村)へ書狀被遣候、早々御遣し可目
 出候、

誠御吉事重疊、抑弓箭立柄連々可申談候處、通路不輒候條、乍存候、聊非疎
 意候、只今御同前之儀、本望至極候、

一、ふもと(龍)其方被仰談、國中へ入魂之儀候哉、先十四種もしより爲使、い、塚
 平左衛門尉を以被仰遣候、乍安中、御頼敷存候處、重々以書狀、直委細承候、
 公私満足之至候、

一、日限之事、大介(概)來廿六ふるへく候哉、可然候、ありと被相定、りからすきと
 御左右、可目出候、るくの儀候間、涯分まり、御申、可爲肝要候、日限
 相定候とも、天氣かとあしく候、又いつと、巨細に可有注進候、
 一、仕役之躰共、方角一所衆又、組中、能々以相談、無越度様專一候、

一、(球磨)當郡之事伊東方彌蜜(密)々申談候、

一、松隈うら神瀬かませ中津道へも、細々計策候、彼者共いつものあひしらひまで候、雖然其方仕役きひしく候、いと可顯心底候、今の分におおるて、現形有りさく候、それさへひつきり候て、でき可申と、今度も見え申さす候、爲御心得候、

一、此方退衆、もさらきあと、催候哉、右申候やう、北原方合力かく候て、難成候、雖然所々城誘等、無油斷其覺悟候、乍恐爰元之地、方々可過御按量候、く、しく彼者存知之前候、

一、前日有りさより如御注進、去十七現行之由承候間、此方人衆も、松隈口田浦境へ雖罷出候、天氣あしく候ゆへ候哉、日限あひのひ候由承候間、先以歸宅候、日限相定候、何時も、兩口同前、可罷出候、一兩日前を以可承候、かまうら、又、ひしり方へも御頼候間、きとの仕合、御推察之前候、

一、其方まで年行一人可罷下之由承候、得其心候へ共、田もし當介難計候、彼

領地もる、罷通候條、不及分別候、此寄合中取置、具可爲御存知候間、追而く、しく承、可得其心候、いとひ彼心底相違候共、人衆さしよせ候者、一人もあしをぬくへりらす候哉、下蘆北寄々の事も、やひしり方へ被仰候間、是もさせる事有ましく候、

一、御現形之時、題目火の手をと、しくあけさせられ候、方々のき、ひ覺罷成候て、一途あるへく候、各領地等放火候とも、後日之仕合可輒候哉、其覺悟專一候、(合圖)志も芦北口ひしり方へ被仰合候、辻も、火の手からす候て、いとそのあひつ、志をりさく候、

一、組中被仰合、あを、國中へ御入魂を以現形候者、庄内退治、不可移時日候間、彼方角調儀題目存候、御油斷候ては、自然露顯候者、公私之可爲迷惑候、被指寄、可爲千勝万勢候、余者期後悦候、恐々謹言、

三月廿一日

(丸目)長將(花押)
(相良)長歡(花押)

(園田刑部少輔)
そきもし

(田浦安藝守)
田あもし

御返報

相良義滋返書
ヲ伊東義祐ノ
臣園田刑部少
輔等ニ遺リテ
合戦ノコトヲ
談合ス

九五 相良長唯義書狀

尙々現形之時者、てきまらひ入ましく候、先とくしく放火候て可
然候、火の手おひひしく候者、方々うらくのきやひ覺よも罷成、お
もひすのまらひも可出來存候、涯分相談專一候、

依弓箭、久敷不申進候、心外候、連々御心底之通、不可有余儀存候處、安中丁寧
ニ承候由、種もしよりいゝ塚平左衛門尉を以被申遣候、千喜万悦候、如日限、
兩口涯分人衆可申付候、堅固才覺頼存候、去十七所々へ人衆指出候へ共、
□儀(タカ)あく候間、先引歸候、能様談合專一候、如存知、當郡之事、悉皆伊東方憑
存候、其方之事者、豊州重治御入魂候間、落着可御心安候、今程爰元之躰、色々
無然之様ニ相聞候哉、無是非候、當時者各一味同心候間、乍恐眞幸八代之分
よて、時儀難事成候、各過较量候、殊米良宮内少輔、番屋越後守、長峯肥後守、
稻□(次カ)郎三郎、於宮原逗留候間、此方之儀、隙明候、旁期後悦候、恐々謹言、

伊東義祐ハ菊
池義武ト入魂
ス

三月廿一日

長唯(花押)

園田刑部少輔殿

同内匠允殿

山□□□殿

田浦安藝守殿

進之候

九六 甲斐親昌書狀

追而、細々御尋畏入候、必應而可申入候、

如御狀、高智尾矢部衆、去廿二廿三合戦候、兩日共ニ高智尾衆、大利之由、重々
其聞得候、爲御存知候、旁以使、可得御指南候之間、先省略候、恐々謹言、

三月廿五日

親昌(甲斐)
(花押)

宮原治部太輔殿

桑原刑部少輔殿

蓑田平右馬允殿

相良文書

御報

甲斐親昌宮原
治部大輔等ニ
高知尾矢部衆
ノ戦勝ヲ報ズ

九七 大友義鎮宗書狀

追而

就發足懇示給候、喜悅候、方々屬案中候之條、可御心安候、然者日州薩州堺目、鉾楯之儀、堅固之覺悟簡要候、將亦其國衆之事、當時在陳之條、雖無申迄候、彌、每事可被添御心事、可爲祝著候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

(永祿十二年) 五月十四日

宗麟(花押)

(義陽) 相良殿

大友義鎮相良
義陽書ヲ遣
リ島津義久ト
ノ合戦ニ協力
ヲ求ム

九八 大矢野鎮運書狀

(上書)

大矢野

高橋中務少輔殿

御報

鎮運

御札之段、遂披見候、仍近日豐州兩老至其表、可爲御來儀候之哉、御繁多察存

大矢野鎮運相
良義陽ノ臣高

橋中務少輔ニ
書ヲ遣リ日向
合戦ノ勝利ヲ
祝ス

候、就夫義陽御乘馬無御所持之由候之而、我々格護之馬御望之趣、示預候、尤、可任御内儀雖存分候、先剋相求候之者、當時足痛候之條、無才覺候、壹疋今立、置候者、進覽可申候、御内々御取合所仰候、將又日孑立柄倍御勝利之由候歟、專要候、何様重疊直可得御意候之條、餘者期其節候、恐々謹言、

十一月八日

鎮運(花押)

高橋中務少輔殿

御報

九九 木上宗閑書狀

去月廿二、貴札同廿九、至日州日智屋城到來、拜見仕候、中途難儀之事候處、被、入御性候事、至義統之御眞實、新不及申候、山裏之者共背順儀、敵方ニ打付候、不謂上下親子兄弟之好、如此之分別、不及沙汰候、如仰石之城ニ薩摩者共雖、取懸候、日州窄人衆、以堅固之地盤被得勝利候、就中長倉勘解由左衛門尉、并、尻伊賀守、八代越前守、長友彌八郎粉骨之次第、名譽此事候、從義統、茂別而被、成御感候、就夫御出勢之儀被差急候、大軍之事候之條、爲先衆、山下狹間、田北

大友氏ノ臣木
上宗閑相良義
陽ニ返書ヲ遣
リ島津義久ト
ノ合戦ノ情況
ヲ報ス日智屋
城

九郎吉弘太藏少輔、今明日之間可爲着陣候、是ハ石之城爲覺悟、田代坪屋江可被差籠之由候、此表之儀、聊非油斷之儀候、其表之事、度々以使僧被申入候哉、可有御馳走之由、尤目出候、尙彼方可被申候、恐惶謹言、

(天正六年)
八月一日

(木上)
宗閑(花押)

(義陽)
相良殿

參貴報

一〇〇 豐臣秀吉書狀

眞幸有河者於所々討捕、頸數十八到來、尤心懸候、彌可抽忠儀事專一候也、

豐臣秀吉相良長每ノ臣深水宗方ノ眞幸有河者ヲ討捕リシヲ褒ス

(天正十五年)
卯月廿六日

○豐臣秀吉朱印

(宗方)
深水三河入道とのへ

一〇一 安宅秀安書狀

猶々治部少へ兵糧并たゝ被進之候、一段畏被存候、相心得可申入旨候、已上、

石田三成ノ臣安宅秀安相良長每ニ書ヲ遺ル

伊東祐兵(三成)ヲ褒ス

御懇札拜見、忝存候、今朝者治部少御振舞可被申處、折節日向伊藤殿ニ朝食候て被參候故、御殘多仕合ニ候、由被申候、將亦夜前者更申候處、致伺候、色々御意、殊御こし物被下、一段御懇情、難申盡候、以面如申上、御留守之儀者、彌不可存疎意候、左三郎殿御事、是又不相替可得御意候條、可御心安候、林藝へ御狀被遣、被入御念段、誠畏存候、御家中衆へも、夜前申上通可申聞候、先手之事者、思召まゝ被仰付、目出度御歸陣奉待候、猶吉事重々可得貴意候、恐惶謹言、

長每征韓軍ノ先鋒ニ加ヘラ

(文祿元年)
三月廿七日

秀安(花押)

(上書)

安宅三郎兵

(相良長每)
賴房様

參御報

秀安

一〇二 相良賴房長願文

(上書)
立願文

(相良長每)
藤原賴房

立願文

相良文書

長每愛宕市房
青井ノ諸社ニ
怨敵退治心願
成就ノ祈願ヲ
ナス

伊東祐兵長每
ノ機張陣替ニ
就キ小屋ヲ贈
ル

一、愛宕大權現江知行拾石分奉奇進、毎年名代參詣之夏、
一、於市房大權現御寶前、大般若經一部眞讀可奉法樂夏、
一、於青井大明神御寶前、十一面法一万座可奉法樂夏、
右意趣者、今度怨敵令退治、求^(球磨)广郡内安全而家長久、心中所願則悉成就皆令
満足之故也、仍祈願如件、

文祿三年甲午七月廿七日

願主 藤原頼房(花押)

一〇三 伊東祐兵書狀

一、^(機張)くちやんへ御陣替ニ付而、小屋之儀、先度左馬助方々被申越候、惡候へ共、家
一ツ令進之候、御用ニ候者、奉行被遣、御取可被成候、扱高麗有着申候ハ、必
參、御見舞可申入候、彼表御用之儀共、可被仰候、聊不可有疎意候、恐々謹言、
八月十六日

伊民太

祐兵(花押)

相良宮内太輔殿

御陳所

一〇四 豊臣秀吉書狀

條々

一、先手動之儀、加藤主計頭、小西攝津守以鬪取之上、二日替るへし、但非番
者二番目ニ可相備事、
一、三番目、黒田甲斐守、毛利壹岐守、嶋津又七郎、高橋九郎、秋月三郎、伊藤民部
太輔、相良宮内太輔可相備事、
一、四番鍋嶋加賀守、同信濃守、
一、五番羽柴薩广侍從、
一、六番羽柴土佐侍從、藤堂佐渡守、池田伊豫守、加藤左馬助、來嶋出雲守、中川
修理大夫、菅平右衛門尉、
一、七番蜂須賀阿波守、生駒讚岐守、脇坂中務少輔、
一、八番安藝宰相、備前中納言、

此兩人どうせい、りりくゝるへき事、

一、釜山浦城、筑前中納言、御目付太田小源五在番仕、先手之注進、無由斷可

相良文書

六〇五

島津豊久
高橋元種
秋月種長
伊東祐兵

仕之事

- 一、(安骨浦)あんごうらい城 (立花宗茂)羽柴柳川侍從在番
- 一、(加徳)かたくの城 (直次)高橋主膳、(廣門)筑紫上野介在番
- 一、竹嶋の城 (小早川秀包)羽柴久留目侍從在番
- 一、(西生浦)せつりの城 (幸長)淺野左京大夫在番
- 一、(重政)先手之衆爲御目付、毛利豊後守、竹中源介、垣見和泉守、毛利民部太輔、早川主馬首、熊谷内藏丞、此六人被仰付候條、任誓昏之旨、惣様動等之儀、日記を相付候而、善惡共に見りくし聞りくはせ、日々可令注進事
- 一、諸事高麗之而之様躰、七人より御注進申上儀、正意にせらるへき旨、被仰聞候間、存其旨、縦縁者親類智音(知)ふりといふ共、(最頁偏願)ひいきるんとなく、有様可注進事
- 一、先手動等之儀、各以相談之上、多分ニ付、可隨其候、ぬけり多ニ一人二人として申やふり候者、曲事ざるへ後事
- 一、於何方も、野陣あるへき事

- 一、赤國不殘悉一篇ニ成敗申付、青國其外儀者、可成程可相動事
- 一、船手之動入候時者、藤堂佐渡守、加藤左馬助、脇坂中務少輔三人申次第、四國衆菅平右衛門并諸手之警固船共、可相動事
- 一、右動相濟上を以、仕置之城々所柄之義、各見及多分ニ付而城主を定、則普請等之儀、爲歸朝之衆令割符、丈夫ニ可申付事
- 一、右七人之者共、七枚起請り、せられ、諸事有様之躰可申上、旨被仰付候條、忠功之者ニハ、可被加御褒美候、自然背御法度族有之者、右七人申次第ニ、不寄誰々、八幡大菩薩可被加御成敗候條、得其意、不可有由斷候事
- 一、自然大明國之者共、朝鮮之都より五日路も六日路も大軍にて罷出、於陣取者各令談合、無用捨可令注進候、御馬廻迄よて、一騎りけよ被成御渡海、即時ニ被討果、大明國迄可被仰付事、案之内ニ候條、於由斷者可爲越度候事

以上

慶長貳年二月廿一日 ○豐臣秀吉朱印

○本文書、紙繼目ノ裏ニ、秀吉ノ朱印ヲ蹈ス、

一〇五 豊臣秀吉高麗陣陣立書

慶長征韓役ノ陣立書

慶長貳年二月廿一日 ○吉朱印 秀
 加藤 主計頭 (清正) 人 壹萬
 此二人先手二日替、但圖取、非番ニ二番め之可備也
 小西 攝津守 人 七千
 羽柴 對馬守 (宗義魯) 人 千
 松浦 刑部卿法印 (鑲信) 人 三千
 有馬 修理大夫 (晴信) 人 貳千
 大村 新八郎 (喜前) 人 千
 五嶋 太和守 (鍾芝) 人 七百
 合壹萬四千七百 人

三番 五千人
 貳千人
 八百人
 六百人
 三百人
 五百人
 八百人
 合壹萬人

黒田 甲斐守 (長政)
 毛利 壹岐守 (吉成)
 同 豊前守 (勝永)
 嶋津 又七郎 (豐久)
 高橋 九郎 (元種)
 秋月 三郎 (種長)
 伊藤 民部太輔 (祐兵)
 相良 宮内太輔 (長每)

島津豊久
 高橋元種
 秋月種長
 伊東祐兵

四番

四よ萬まん貳に千人

鍋

嶋

加賀(直茂)守

同

信

濃(勝茂)守

五番

壹いち萬まん人

羽柴薩(島津義弘)廣侍從

六番
 三千人
 藤堂佐渡守(高虎)
 池田伊豫守(秀氏)
 加藤左馬助(嘉明)
 來嶋出雲守(通總)
 千五百人
 中川修理大夫(秀成)
 菅平右衛門尉(達良)
 貳百人
 四そふ合壹万三千三百人

七番

七千貳百人
 蜂須賀阿波守(家政)
 貳千七百人
 生駒讚岐守(一正)
 千貳百人
 脇坂中務少輔(安治)
 三そふ合壹万千百人

五いそふ三万人 安藝宰相(毛利秀元)
 とうせい
 此兩人先陣ハリハリ
 壹万人 備前中納言(宇喜多秀家)
 とうせい

壹万人此内三ヶ所之城々々見計可加勢也
(釜山浦) 釜山いの城 筑前中納言(小早川秀秋)
 三百九十人 御目付 太田飛驒守(吉)
(安骨浦) 安骨いの城 羽柴柳川侍従(立花宗茂)
 五千人 高橋主膳正(直次)
(加徳) 加とくの城 五百人
 筑紫上野介 竹嶋の城 千人
(西生浦) せいのの城 三千人 淺野左京大夫(華長)
城々在番衆 合貳万三百九拾人
 惣都合拾四万千五百人

進無由斷可申上也

右四ヶ所ニ次船を置毎日先手より注

かこや
(名護屋)

つしま
(對馬)

いぎ
(壹岐)

ふぢ
(釜山)

ら
(浦)

寺澤志廣守
(廣高)

祐兵長每ノ渡
海遅延セルヲ
見舞フ

祐兵長每ノ陣
替ニツキ談合
ス

一〇六 伊東祐兵書狀

態申入候先度者遠路之處御狀忝候自是社早々可申入處御渡海遅候由承
候付而申後御報罷成所存之外候其元御陣所如何被仰付候哉御苦勞之段
無申計候尤參御見舞申度候へ共此中番船此表打通申之付普請等申付候
條先以書狀申入候何様以面上可申述候恐惶謹言

伊民太

(慶長二年)
二月廿八日

祐兵(花押)

(相良長每)
相宮太様
人々御中

一〇七 伊東祐兵書狀

(毛利吉成)
申談壹州へも可申入候以上

態申入候先度者預御使札候委細御報ニ申入候キ相届申候哉隨而此地何
比御陣替可被成候哉承度存候先度如申入其許御出可被成前方ニ慥る
仁此地へ御越可被成候申談御陣所其外諸事御談合可申候間其御心得尤

相良文書

六一七

候、御報ニ時分柄被仰越候者、船おと御迎ニ可進之候、委曲奉待候、猶此使可申候、恐惶謹言、

伊民太

(慶長二年カ)
卯月十九日

祐兵(花押)

一〇八 伊東祐兵書狀

以上、

新春之慶賀、尤參御慶可申述處、難去隙入儀、御座候條、以使札令申候、何様以面上、御吉事可申述候、恐惶謹言、

伊東民部太輔

正月六日

祐兵(花押)

相良宮内太輔殿

(長每)
人々御中

一〇九 伊東祐兵書狀

猶以、爲御祝儀、二百疋被懸御意、畏存候、已上、

陣中音問ヲ謝ス

先度者、此地御越之刻、預御尋候處ニ、鷹野へ罷出、不懸御目、御殘多存計候、尤其後者、早々以書狀成共可申入之處ニ、何うと仕、無音罷過、致迷惑候、何様以參可得御意候、恐々謹言、

伊民太

正月廿一日

祐兵(花押)

相良宮内太輔殿

御陣所

一一〇 伊東祐兵書狀

已上、

遠路被寄思、召御使札、畏入候、從是社切々以書狀成共可申入處、程遠故、又者任無御等閑、無音、背本意候、御陣所御在付之由、可然存候、隨而奥へ於働者、可爲此方一手之由、御朱印候、一入我等満足此事候、猶御使者口狀ニ申含候間、不能細碎候、恐々謹言、

伊民太

秀吉祐兵ニ奥地へノ進撃ヲ命ズ

卯月十二日

相良宮内太輔殿

御報

一一一 伊東祐兵書狀

尙以御念を被入、早々御尋忝次第候、其元御隙之透御座候者、爰元へも
ちと御立出被成、御遊山可有候、以貴面申承度候、以上、

當陣ニ喧嘩御座候付而、早々爲御見舞預御使者ニ候、御念被入之段、忝令存
候、拙子此中唐嶋へ罷越候而、只今罷歸候、喧嘩之儀も罷戻候而承候、我等者
不てハ無之候間、可御心安候、次ニ唐嶋表ニも、何る珍敷沙汰無御座候、何
様以參見廻可申入候、猶委細者御使者へ申含候間、不能細筆候、恐々謹言、

伊民太

八月十七日

祐兵(花押)

相良宮内太輔殿

御報

一一二 伊東祐兵書狀

祐兵長每ニ鐵
炮火藥入レノ
竹筒ヲ求ム

猶以てつわうの藥入ニ可成申竹御座候者、可被下候、竹無御座候者、藥
を御入被成候て被置□□成共申請度候、爰元ニ一圓竹無御座候て、申
入事候、以上、

先度者御使札、殊ニ爰元珍敷鴈被懸御意、畏存候、其後早々可申入之處ニ、何
うと仕無音、所存外候、其許於御隙者、些此地爲御遊山、御立出可被成候、以貴
面、相積儀共申承度候、先日於其地不懸御目、御殘多存計候、御用之儀共候者、
可被仰越候、恐々謹言、

伊東民部太輔

九月十六日

祐兵(花押)

相良宮内太輔殿

御陣所

一一三 伊東祐兵書狀

尙以、先度ハ藥入之竹之筒之儀、申候處、見事成を被懸御意、畏入候、此地
相應之御用等候者、可蒙仰候、以上、

相良文書

先度者預御狀過分令存候其後自是社可申入之處ニ、唐嶋へ罷越、夜前歸宅仕、無音罷過、致迷惑候、然者くら嶋表、替儀無御座候、番船も此程罷居候所、五六里々と引のき候之由申候、可御心安候、替御左右共相聞候者、即可申入候、恐々謹言、

十月九日

祐兵〔花押〕

〔上書〕

相良宮内太輔殿

御陣所

伊民

一一四 伊東祐兵書狀

尙以鮎□まし桶一ツ、令進之候、御音信迄ニ候、此地御用之儀共候者、可被仰越候、已上、

態令申候、其後者以書狀成共御見廻可申之處ニ、無音罷過、所存之外候、其元何等之御事共候之哉、珍敷御沙汰共候者、承度候、爰元替儀無御座候、題目無之候へ共、此中無音仕候間、御見廻迄ニ如此候、何様与風參候而、可得御意候、猶期後面之時候、恐惶謹言、

鮎鮎ヲ贈ル

霜月七日

祐兵〔花押〕

〔上書〕

伊民太

相良宮内太輔殿

御陣所

祐兵

一一五 徳川家康書狀

今度庄内表人數等、被入精加勢之由尤候、彌油斷在間敷候、委細寺澤志摩守〔廣高〕可申候之間、不能候、恐々謹言、
〔細筆脱カ〕

十二月廿四日

家康〔花押〕

〔長每〕

相良左兵衛佐殿

一一六 井伊直政書狀

尙々、御使者如被見申候、少々手を負申候間、判形不仕候、以上、
〔種長〕
尙々、秋月殿へも以狀も可申進候得共、未申通候間、無其儀候、御心得頼入候、此御身上之儀も、貴所御指圖次第、少も御無沙汰申ましく候、以上、
〔徳川家康〕
御使者口上之通、具ニ承候、其城ニ御座候儀、一圓不存候キ、前々より内府へ

伊集院忠真島津義弘ニ敵對ス、家康長每ヲシテ忠真ヲ伐タシム

關ヶ原役ニ長毎大垣城ヲ守

井伊直政ニ依
リテ徳川家康
ニ内應ス

御入魂之儀ニ付而、急度御忠節、城之儀早々可被相渡之旨承候、頓子細共御座候而、相濟儀ニ御座候間、一刻もこやく御忠節尤存候、高橋殿へ以別紙可申候得共、未申通候間、無其儀候、是又御身上之儀、内府前之儀、貴所御指圖次第、何様にも馳走可申候、少も如在申間敷候、一人之儀被仰越候、尤存候、委細御使者口上ニ可被申候、恐々謹言、

井伊兵部少輔

(慶長五年)
九月十六日

直政 ○ 黒印、印
文龍カ、

相良左兵衛殿

御陣所

一一七 井伊直政書狀

直政長每ノ討
取リシ熊谷直
盛等ノ首級ヲ
家康ノ實檢ニ
備フ

十八日之御狀、昨日於大津致披見候、一、熊谷内藏丞、垣見和泉守、木村惣左衛門尉、頸被討捕候、先度被仰達候、首尾合申候而、尤存候、即内府へミセ申候、被入御精、早速如此之儀、祝着被申候、被明御隙、此方へ御越之節、以面上万々可申承候、一、福原右馬助可有御成敗之旨、尤候可有御才覺候、一、秋月殿、

福原左馬助ノ
成敗

高橋殿の別紙に申入候得共、御心得所仰候、何も面談之節可申承候、恐々謹言、

井兵部

(慶長五年)
九月廿一日

直政 ○ 黒印、前號ノ
モノニ同ジ、

相良左兵衛様

御報

一一八 相良頼兄書狀

長每秋月種長
高橋元種等ト
議リ大垣城ノ
ヲ守將等ヲ斬リ
テ家康ニ應ズ

大柿よ左兵衛、井伊兵部少輔殿、黒田甲斐守殿へ使者を遣候、日限九月十五日未明ニ指出候へ共、御人數ニ相と、こなり、翌日十六日さめりいよて兵部少輔殿へ懸御目候處、兵部少輔殿、御使勝五兵衛と申人、大柿へ被成御越候、秋月、高橋よも致内談、同十七日ニ垣見和泉、熊谷内藏丞、木村宗左衛門尉父子討果し、右之首もよせ進上申候、同廿日、於大津内府様へ上申候、并大柿本丸同廿三日ニ相渡、同廿八日大坂にて内府様へ左兵衛御禮申上候、以上、

相良文書

六二五

(慶長六年カ) 六月三日

黒田甲州様

相良(頼兄)清兵衛尉(花押)

一一九 山岡景友道阿書狀

猶々如水へも御禮可被仰候、唯今桑山修理所(晴カ)ニ居申候、是成とも可有御出候、いそぎ申候、以上、

黒田孝高長每
ナ家康ニ取成
ス

夜前御尊申出候、如水も其座ニ御座候て、御取合共候、定而様子可被仰渡候、(清正)貴所御事、山中ニて候間、役儀かとも可被成御用捨との御事候、又加藤主計御間之事も、急度相濟候へとの御事ニ候之條、爲御意得申入候、唯今上方へ之通路、日向のとく御通之由ニ候、肥後の様ニ可然との御事候、一段と忝御意共ニ候間、可被成其御意得候、何も懸御目候へて、書中ニて不得申候、恐惶謹言、

八月廿四日

山岡景友(山岡景友)
山道阿(花押)

相良殿

人々御中

家康長每ニ命
シ米良山ヲ鷹
巢山ト爲サシ

一二〇 徳川家康書狀案

米良山之儀、如前々鷹巢山被仰付候、然者彼巢山へ弓鐵炮一切不可入候、并於巢山之中、山畑燒候事、是又可停止候、以右之旨、米良小右門尉堅可被申付候也、

慶長六年 九月廿九日

徳川家康(徳川家康)
御黒印

相良左兵衛尉殿

一二一 相良長每書狀案

あらたはの御ととふき申上りいらせ候、いく久しく御たういよ申成くを(符)ましく候、こせらの御よろこひとして、ひとへ物ニツのうち、(紅)ゑよ一ツ進之をくりまいらせ候、御ゆひひまでニ候、(伊東祐慶)とよまゆり殿御さひると御入候て、御よろこひ自是さゆしまいらせ候、お茂此平次申上候へく候あいよ、筆茂とよめ候て候、うしく、

慶長十一年 彌生十三日

相良文書

長每伊東祐慶
ノ母ニ音物ヲ
遺ル

祐慶江戸城普
請ノコトニ從

日向古文書集成

伊東しゆりさま
御袋さほ

御申給へ

一二二一 相良長每書狀案

其以來者不申通候如何御普請可爲御最中事自是奉察候扱々炎天刻各御
苦勞自是令察迄候何頃可爲御成就儀候や且夕承度存計候御國元彌以御
無事ニ候可御心安候將亦御袋様御堅固ニ御座候之哉大慶之至候其地へ
及堪忍申候間可被添御心事所希候旁期後喜之時候(尙脱カ)可申入候恐惶謹言

卯月一日

伊東修理様

人々御中

一二二三 伊東祐慶書狀

猶々了心様一段御息災候可御心易候以上

于今此地ニ御逗留之由承候間以書狀令申候今度者於江戸節々申承本望
此事候拙子事仕合能御暇被下一兩日前ニ爰元へ罷上候御心安可被思召
候我等も永々東ニ滞留仕候間近々可罷下と存候貴様何比御下國可有之

徳川秀忠祐慶
ニ歸國ノ暇ナ
與フ

哉其元御用共御仕舞候者此地へ御越待申候猶以面上可申承候恐惶謹言
六月六日 伊修理大夫

相内藏助様

人々御中

祐慶(花押)

一二四 相良長每書狀案

追而諸神も照覽實否糺明之上ニ候間如此候以上

態啓上候去年以來犬童三郎兵衛ちくてん申其地へ滞留申候間度々御理
申入候之處ニ被召返候重罪不淺者之儀候へ共對貴様此中別儀を不存召
置候之處ニ尙以重罪有之ニ付而頃遂糺明候勿論不届儀まで候結句又々
ちくてん可申様ニ親類共々披露申候間於今躰者令成敗候最前之爲首尾
如此候恐惶謹言

九月廿一日

秋長門守様

人々御中

相良文書

長每犬童三郎
兵衛ノ成敗ニ
就キ秋月種長
ニ告グ

一一二五 德永家日記并御當家日記寫

慶長十八癸丑、桑木困井、日州縣ノ領主高橋右近允殿(元種)天下ヨリ御改易ニ付、
 諸法度跡式被仰付豊後國稻葉彦六殿相良左兵衛尉賴房公、右御兩殿御立
 也、求麻(球磨)ヨリハ十一月十日ヨリ御陳立ニテ、城輒御在城ニテ、御仕置慥ニ被
 被仰付、御飯陳也、縣ヲハ長崎之有馬修理大夫御拜領ニテ所持入也、
 右德永家日記ノ寫、

幕府稻葉與通
 及ビ相良長每
 チシテ縣ノ領
 主高橋元種改
 易ノ始末チナ
 サシム

有馬直純ニ縣
 ナ與フ

慶長十八癸丑、桑木困井、大將軍西日州縣ノ領主高橋右近允殿御改易ニ付、
 跡式御仕置トシテ、天下ヨリ仰付ニテ、豊州ヨリ稻葉彦六様、相良賴房公、右
 御兩殿御立也、求麻ヨリハ十一月十日ニ御陳立ニテ、縣ノ城江輒ク御在城
 ニテ、御仕置慥ニ仰付、御飯陳也、縣領分有馬修理殿拜領ニテ所持入也、
 右御當家日記寫、

一一二六 相良長每覺書

典通及ビ長每
 ナシテ縣城ヲ
 請取ラシム

慶長十八十月、日州縣城主高橋右近將監元種改易、稻葉彦六郎正通(典)相良宮
 内太輔賴房、後長每、右之城受取被仰付、
 十一月十日、賴房公御發足、清兵衛(相良賴兄)父子御供、雜兵二百餘人、
 同十四日、御兩所縣御着、城御受取、

一一二七 本多正信等連署奉書

以上

十一月廿一日之御狀、極月十五日令拜見候、仍高橋右近(元種)居城去十五日ニ
 御請取、家財改被爲置之由、得其意存候、
 一、最前者家財共ニ、御改可在之由申入候へ共、重而之書狀ニ、家財之儀者、右
 近へ被下候間、知行分之先納御請取可被成旨申入候、其分御心得可有事、
 一、右近舟之儀蒙仰候、御上米拂方ニ入可申舟之分者、御留候て、其外事ハ、右
 荷物以下住所へ可被相届候間、御見計候て、右近方へ被遣尤候事、
 一、女共之儀者、右近指圖次第ニ被成、重而御注進可有候、恐々謹言、

本多正信等德
 川秀忠ノ旨チ
 奉シ縣城處分
 ナニ就キテ指示
 ナ與フ

(慶長十八年)
極月十五日

安藤對馬守

重信(花押)

土井大炊助

利勝(花押)

酒井雅樂頭

忠世(花押)

本多佐渡守

正信(花押)

稻葉彦六殿
(典通)

相良左兵衛殿
(長每)

御報

一二二八 永井直勝本多正純連署書狀案

一書申入候、仍高橋右近居城、同領分共ニ、有馬左衛門佐、長谷河左兵衛請取
(直純)
可申旨被申候、何時成共、兩人の方へ御渡可有之旨、御意ニ御座候爲其
(藤廣)

本多正純等徳川家康ノ旨ヲ奉シ有馬直純長谷川藤廣ニ縣城ヲ渡スベ

キコトヲ典通長毎ニ告グ

申入候、恐々謹言、

(慶長十九年)
六月九日

本多上野介
(正純)
永井右近
(直勝)

稻葉彦六殿

相良左兵衛殿

一二二九 有馬直純書狀案

一書令啓上候、仍近日其地へ就罷越、先度申入候八木之事、都合千石、此林田
半九郎へ可被成御渡候、萬々以貴面、此中之御禮可申述候、恐惶謹言、

直純轉封ニツキ米千石ヲ渡サレンコトヲ長毎等ニ求ム

(慶長十九年)
七月五日

有馬左衛門佐
(直純)

使者林田半九郎

稻葉彦六様

相良左兵衛佐様

人々御中

一三〇 長谷川藤廣書狀案

態一書令啓上候、仍高橋右近殿跡式、居城領分共ニ、有馬左衛門佐殿拜領被

長崎奉行長谷川藤廣家康ノ

相良文書

六三三

命ニヨリ高橋
元種ノ遺領ヲ
直純ニ渡スベ
キ旨ヲ長每等
ニ通ズ

日向古文書集成

六三四

申候、從本上州重而書狀參候間、爲持進候、無相違有馬左衛門佐殿へ、其地御
渡可被成候、拙者も其地へ參候而申承度存候へ共、爰元彼是不得寸隙候間、
其儀無御座候、將又山口駿河殿(直友)、きりまゝん就仕置之儀御下にて候、猶重而
可申上候間、書狀不能具候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
七月七日

長谷河左兵衛
(藤廣)

使者森忠左衛門尉

稻葉彦六様

相良左兵衛様

人々御中

有馬殿、長谷河殿使者七月十四日ニ參着候也、

一三一 本多正信書狀

已上

相良長每縣城
ヲ直純ニ引渡
シテ歸城ス
正信之ヲ秀忠
ニ披露ス

高橋殿拜領之地、不殘有馬左衛門佐殿へ七月廿六日ニ御渡、則御歸城被成
候由、被仰下候趣申上候處ニ、尤被思召、不大形御仕合共ニ御座候條、當地へ
參上被成候儀ハ、當年ニ而も來年ニ而も、貴公御手向能様成る時分御尤候、

就中稻葉彦六殿ハ、御普請彼是之爲ニ參上被成之由示預候、如御内意之、何
ニ而も上參之時分可申談候間、様躰御心安可被思召候、將又各へ之書狀之
御報被申入候キ、彌可被爲得其意候、恐惶謹言、

本多佐渡守

(慶長十九年)
八月廿五日

正信(花押)

相良左兵衛様

貴報

一三二 相良賴寬送狀

覺

- 一、豐前國上毛郡内成經名補任地頭職之御文書一通
- 一、肥後國求麻郡可令領知之讓狀貳通
- 一、異賊合戰勳功之令旨貳通
- 一、朝敵追討軍兵被食令旨壹通
- 一、日向國北鄉領家職御預之文書貳通

相良賴寬重代
ノ文書ヲ阿倍
正之ニ送ル

北鄉領家職

相良文書

六三五

一、肥前國守護職之令旨一通

一、右同守護職安堵之薄墨之繪旨一通

右十通也、

右分持申候、御請取候て可被下候、

六月廿日

相良(賴寬)壹岐守(花押)

(阿倍正之)
安部四郎五郎様

參

一三三三 江戸幕府老中連署奉書

(上書)

相良壹岐守殿

酒井雅樂頭

松平伊豆守

阿部豊後守

幕府頼寬チシ
テ推葉山切支
配セシメメ切支
丹ノ取締ヲ嚴
ズニスベキヲ命

惟葉山之事、其方支配被仰付之上者、從先年度々如被仰出候、幾里支丹宗門之儀、堅可被相改之、并他所之輩不可差置之、惣而申分於有之者、其方訴之、落着可仕候、万一不致訴訟而不叶子細有之時者、彼族江戸令參上、奉行所

迄言上候之様尤候、右之趣惟葉山中之輩、兼々急度可被申渡者也、仍如件、

明曆二申

閏四月十八日

(阿部忠秋)
豊後守(花押)

(松平信綱)

伊豆守(花押)

(酒井忠清)

雅樂頭(花押)

相良壹岐守殿

一三四 湘雪守沅書狀

猶々、來春御參勤ノ時分承候者、伏見へ罷出可得貴意候、久々懇望候、

去五日之尊書廿六日落手拜見、忝候、御無事ニ御在城珍重、其上惟葉山ノ義

御支配候事、誠以御手柄不淺候、常々御奉公之印と奉察候、恐惶頓首、

(明曆二年)
七月廿六日

(湘雪守沅)
沅西堂(花押)

壹岐守様

□□□□

一三五 相良長武(賴)書狀

追而啓上、久世三四郎殿子息、坂部三十郎殿子息、始而御目見えニて候、

守沅頼寬ノ推
葉山代官拜領
ヲ祝ス

在江戸ノ相良
頼喬頼寛ニ
府ノ相葉山衆
ヲ取調ベノコト

爲祝儀、後便ニ御狀被遣可然りと奉存候、拙者御見廻申候、具之段ハ去
五日ハ飛脚ニ申上候、以上、

一筆啓上仕候、先以御當地御靜謐(徳川家綱)、公方様増御機嫌能被成御座候間、可被成
御満悦候、貴公様彌御勇健ニ被成御座、郡中并椎葉山無異ニ可有御座与、目
出度奉存候、爰元兩屋敷無事、拙者息災罷在候、旁以尊慮安可被思召上候、然
者過四日椎葉山之者共御評定場へ被召出、伊豆守殿被仰候趣、四郎五殿(松平信綱)
書狀被遣候條、大坂迄差越申候、重而評定所へ被召出、可被仰付之由候間、相
濟次第、急度飛脚進上可申候、將又此比被仰出候諸役并所替御目見え杯之
儀も、四郎五郎殿ハ委細御申越候間、不能重筆候、猶奉期後音之時候、恐惶謹
言、

相良長次郎

(明暦二年)
八月十一日

長武(花押)

頼寛様

參人々御中

一三六 江戸幕府老中連署奉書

(上書)

酒井雅樂頭

相良壹岐守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

以上

一筆令啓候、椎葉山那須勘右衛門、同小平次、同助兵衛、彼地令欠落、有馬左衛門(康純)
門佐領分鬼神野村ハ立退有之由、安倍四郎五郎所迄被申越候書狀之趣、得
其意候、然者右三人者共儀、求麻ハ差越候様ニ与、左衛門佐方ハ奉書遣之候
間、其元へ參候者、御條目之趣申聞、其上様子具ニ被承届、可有注進候、恐々謹
言、

十一月十九日

阿部豊後守

忠秋(花押)

松平伊豆守

信綱(花押)

相良文書

六三九

椎葉山ノ者那
須勘右衛門出
有馬領内ニ出
奔ス幕府有馬
幕令シメテ送
ニシテ頼寛ヲ
シテ之ヲ取調
進ベ其仔細ヲ

相良壹岐守殿

酒井雅樂頭

忠清(花押)

一三七 江戸幕府老中連署奉書

猶以、左衛門佐の遣候奉書寫遣之候、可有披見候、以上、

一筆令啓候、椎葉山奈須勘右衛門、同小平次、同助兵衛、彼地令欠落、有馬左衛門、佐領分、鬼神野村の立退有之由、阿部(倍)四郎五郎所迄被申越候書狀之趣、得其意候、然者右三人之者共儀、求麻の差越候様ニ与、左衛門佐方の奉書遣之候間、其元の參候者、御條目之趣申聞、可有注進之由、去十九日以次、飛脚相達候、雖然万一求麻の相越候儀、右三人之者共氣遣ニ存、參う候ハ、左衛門佐領分ニ其儘差置之、其方々も家來遣之、左衛門佐者と立合、様子可被聞届候、縱何方へ欠落候共、不苦事候間、被得其意、緩々と被承届、具可被申越候、此段左衛門佐方へも申遣候、右三人之外ニも、男女數多左衛門佐領分迄參候

幕府重テ頼
寬ニ令シテ
者罪科チ恐
テ歸住チ肯
ザル時ハ使
遣シ康純ト
ニ取調チ行
ベキコトヲ
命

百姓ノ逃散ハ
領主ノ過失

由申來候間、いつとも氣遣成儀者有之間敷候、大勢立退候者、科無之候共、其段あやまりよ可罷成候、其上勘右衛門、小平次、助兵衛、さめにも惡可有之候間、其段申聞、在所の歸候様ニ可仕之旨、左衛門佐へ申遣候間、被得其意、左衛門佐与可被相談候、恐々謹言、

十一月廿四日

阿部豊後守

忠秋(花押)

松平伊豆守

信綱(花押)

酒井雅樂頭

忠清(花押)

相良壹岐守殿

一三八 江戸幕府老中連署奉書案

以上

相良文書

去朔日御狀令披見候、椎葉山奈須勘右衛門妻子、先月晦日鬼神野村に參候、助兵衛、小平次妻子同前ニ水清谷ニ差置候、其外欠落之者ハ、領分於境目押留、數多被返之候、別番書付之者共ハ、是非罷歸間敷与申ニ付、其儘被差置之由、得其意候、奈須勘右衛門、同小平次、同助兵衛、此三人之外、大勢立退候ハ、科無之候共、其段あやまり可成候、其上勘右衛門、小平次、助兵衛ためにも惡可有之候間、此趣申聞、椎葉山に罷歸候様ニ、彌合之、可被相返候、然者去十九日、右三人之者、求麻に可被差遣之旨、以次飛脚相達候、万一氣遣ニ存、參ル候ハ、三人共ニ其儘領内ニ差置之、從相良壹岐守、家來可參候間、其方者と立合、様子可被聞届候、縱何方へ欠落候ても、不苦事候間、緩々与被承届、可有注進候、此趣壹岐守へも申遣候、其狀之寫差越候、被存其趣、壹岐守与宜被相談候、恐々謹言、

十一月廿四日

阿部豊後守

松平伊豆守

酒井雅樂守(頭)

有馬左衛門佐殿

一三九 江戸幕府老中連署奉書

猶以左衛門佐へ遣候奉書、寫之、爲念重而差越候、以上、

一筆令啓候、椎葉山奈須勘右衛門、同小平次、同助兵衛、彼地令欠落、有馬左衛門佐領分、鬼神野村に立退有之由、阿倍四郎五郎所迄被申越候書狀之趣、得其意候、然者右三人者共儀、求麻に差越候様ニ与左衛門佐方に奉書遣之候間、其元へ參候者、御條目之趣申聞、可有注進之由、去十九日、以次飛脚相達候、雖然、万一求麻に相越候儀、右三人者共氣遣ニ存、參ル候ハ、左衛門佐領分ニ其儘差置、其方も家來差遣、左衛門佐者と立合、様子可被聞届候、縱何方に欠落候共、不苦事候間、被得其意、緩々と被承届、具可被申越候、此段左衛門佐方へも申遣候、右三人之外にも、男女數多左衛門佐領分迄參候、由申來候間、何も氣遣成儀者有之間敷候、大勢立退候ハ、科無之候共、其段あやまり可罷成候、其上勘右衛門、小平次、助兵衛ためにもあしき可有之候間、其

段申聞在所へ歸候様ニ可仕之旨、左衛門佐に申遣候間、被得其意、左衛門佐
与可被相談候、右之趣一昨廿四日申遣候へ共、次飛脚候間、滯儀可有之哉と、
爲念重而如此候、恐々謹言、

阿部豊後守

忠秋(花押)

十一月廿六日

松平伊豆守

信綱(花押)

酒井雅樂頭

忠清(花押)

相良壹岐守殿

一四〇 江戸幕府老中連署奉書案

去朔日之御狀令披見候、椎葉山奈須勘右衛門妻子、先月晦日鬼神野村に參
候、助兵衛、小平次妻子同前水清谷に差置候、其外闕落之者、於領分境目押

重不テ直純ニ
モ指示ス

留數多被返之候、別紙書付之者共、是非罷歸間敷与申ニ付而、其儘被差置
之由、得其意候、奈須勘右衛門、同小平次、同助兵衛、此三人之外、大勢立退候と、
科無之候共、其段誤ニ可成候、其上勘右衛門、小平次、助兵衛爲ニも惡可有之
候間、此趣申聞、椎葉山に罷歸候様、彌含之、可被相返之候、然者右三人之者、求
麻に可被差遣之旨、去十九日以次飛脚相達候、万一氣遣ニ存、參兼候へ、三
人共ニ其儘領内ニ差置之、相良壹岐守より家來可參候間、其方者と立合、様
子可被聞届候、縱何方に欠落候而も不苦事候間、緩々与被承届、可有注進候、
此趣壹岐守へも申遣候、則其狀之寫差越之候、被存其趣、壹岐守与宜被相談
候、右之段一昨廿四日雖相達候、次飛脚に候之條、滯儀可有之歟与、爲念重而
如此候、恐々謹言、

十一月廿六日

阿部豊後守

松平伊豆守

酒井雅樂頭

有馬左衛門佐殿

相良文書

一四一 江戸幕府老中連署奉書

〔上書〕

酒井雅樂頭

相良壹岐守殿

松平伊豆守

阿部豊後守

三度指示ス

去月十四日之御狀并安倍四郎五郎所迄一書之通、使者口上之趣承届候先、月廿四日自是如相達候、椎葉山奈須勘右衛門、同小平次、同助兵衛、彼地令欠落、有馬左衛門、佐領分へ立退有之候付而、求麻へ右三人之者差越候様と、最前奉書遣候間、其許へ參候者、御條目之趣申聞、可有注進候由相達候、雖然、万一求麻へ參候儀氣遣存、相越兼候者、左衛門佐領分ニ其儘差置、其方も家來遣之、左衛門佐者と立合様子可被聞届候、縱何方へ欠落候共、不苦事候間、被得其意、緩々と承届、具可被申越候、此段左衛門佐方へも申遣候、右三人之外、男女數多左衛門佐領分迄參候由申來候、何も氣遣成儀、有之間敷候、大勢立退候者、科無之候共、其段可成誤候、其上勘右衛門、小平次、助兵衛爲

ニも悪可有之候間、入念申聞、在所へ歸候様ニ可仕之旨、是又左衛門佐へ申遣候、被存其趣、左衛門佐と委細可被相談候、尙相含使者候、恐々謹言、

十二月十九日

阿部豊後守

忠秋〔花押〕

松平伊豆守

信綱〔花押〕

酒井雅樂頭

忠清〔花押〕

相良壹岐守殿

一四二 江戸幕府老中連署奉書

〔上書〕
相良遠江守殿

椎葉山之事、支配被仰付之上者、從先年度々如被仰出、那〔耶〕蘇宗門之儀、堅可被改之、并他所之族不可差置之、總而申分於出來者、其方訴之、可遂落着、万一

相良文書

六四七

幕府頼命
シ葉山ノ切
支丹取締リ
殿ニシテ
先ズ頼
裁決セシム

不致訴訟而不叶子細有之者、彼輩令參府奉行所迄可言上之旨、如前々急度可被申渡者也、仍執達如件、

寛文四辰
六月朔日

(久世廣之)
大和守(花押)

(稻葉正則)
美濃守(花押)

(阿部忠秋)
豊後守(花押)

(酒井忠清)
雅樂頭(花押)

(賴喬)
相良遠江守殿

一四三 江戸幕府老中連署奉書

(上書)
相良遠江守殿

米良山之儀、如前々巢鷹山被仰付之上者、弓鋌炮不可入之、并巢鷹山之中、山畑燒之事御停止之段、任慶長六年九月廿九日先御代御黒印旨、彌堅可申付之由上意候、被存其趣、米良主膳可被申付之者也、仍執達如件、

寛文四辰
六月朔日

(久世廣之)
大和守(花押)

(稻葉正則)
美濃守(花押)

(阿部忠秋)
豊後守(花押)

(酒井忠清)
雅樂頭(花押)

相良遠江守殿

一四四 相良頼喬口上覺書案

(包紙上書)(廣之)
久世大和守殿 口上之覺

一、山之者共、亡父壹岐守支配不被仰付以前者、佗所、柚取を入、材木を出し、助成ニも仕候處、支配被仰付以後者、他所之者、彼山、入不申様ニ申付候、子細者、彼山ニ大杉大松、少々御座候へ、ケ様之木共、万一公儀御用、木ニ被召上儀、可有御座歟、猥柚を入、山をきり、からし候而、如何ニ御座候、其上、柚之者共、彼山、入籠候而、數年山中致滞留、其近付好之者多、入交申由承候間、若如何様之惡黨者、吉利支丹、參隱居可申も難計候故、支配被仰付以後者、柚之儀、禁制申付、頭共四人、少知與置、其外組頭廿人計

賴喬 椎葉山ノ
繪圖ヲ老中久
世廣之ノ一覽
ニ供ス
椎葉山ニ他所
ノ柚取ヲ禁ズ
公儀ノ御用ニ
支障無カラシ
メンガタメノ
用意

幕府米良山ヲ
巢鷹山ト爲シ
弓鋌炮ノ入山
及ビ山畑ヲ燒
クコトヲ禁ズ

賴喬江戸ノ私
山ノ材木ヲ取
ラシコトヲ幕
府ニ請フ

こゝ、扶持切米申付候、然共惣山中之者共助成無之付、勝手不自由罷成、致迷惑候之間、先年之通材木自由ニ出申度候、由度々家來之者共迄申候へ共、右之通之所存御座候故、不申付候、此段私方々遮而奉窺之候へ、万一拙者勝手之ためも仕度存申上候様ニ可被思召歟、与奉存、遠慮仕候之處、幸御尋付申上候、
一、材木爲出候得者、其川筋之衆中之ためも能御座候、由承之候事、
一、山之者共、材木出候へ、拙者方々罷出候人數不殘飯米とらせ可申候故、
山之者共、夫を内々願申候、且又當御地私屋鋪、先年類火以後、未作事等（江戸）罷成、私勝手も能御座候、右之通不仕候在所々材木廻候儀者、不自由ニ御座候、彼山よわ出候へ、川筋好御座候而、海路拔群近く取寄申候儀（江戸）罷成、私勝手も能御座候、右之通御座候間、今度御切紙一通被下候へ、在所へ罷歸、山之者共相互ニ熟談の上ニ而可申付候、若又障申儀も御座候へ、其段追而可申上候、

一四五 江戸幕府老中連署奉書

(上書)

相良遠江守殿

稻葉美濃守
久世大和守
土屋但馬守
板倉内膳正

幕府用木分以外ハ伐採ヲ許ス
椎葉山之儀、繪圖并書付之趣令承知候、大木之松杉等、可成御用木分者、被印置之、御用之節伐之、江戸大坂に以廻船可被差上之候、其外之木者、爲山中之輩助成、又者其方自分用所等、是又連々可被伐之候、恐々謹言、

六月十七日

板倉内膳正
重矩(花押)
土屋但馬守
數直(花押)
久世大和守
廣之(花押)
稻葉美濃守

正則(花押)

相良遠江守殿

一四六 江戸幕府老中戸田忠昌奉書

(上書) 相良遠江守殿

戸田山城守

椎葉山内ノ住
民徳右衛門高
松ニ赴キ小野
眞正ニ不埒ノ
訴ヲナス

其方支配所椎葉山之内不動野村椎葉徳右衛門儀、高松に罷越、小野長左衛門方は不埒之儀訴之旨申來付而、徳右衛門召寄、遂穿鑿、口上書數通并證文繪圖等差添、委細覺書之趣各披見之事候、紙面之通可被申付候、恐々謹言、

戸田山城守

十月十三日

忠昌(花押)

相良遠江守殿

一四七 江戸幕府老中連署奉書

(上書) 相良遠江守殿

幕府頼喬ニ重
ネテ椎葉山支
配ノコトヲ令
ス

椎葉山之事、支配被仰付之上者、從先年度々如被仰出、耶蘇宗門之儀堅可被改之、并他所之輩不可差置之、惣而申分於出來者、其方は訴之、可遂落着、万一不致訴訟而不叶子細有之時者、彼族江戸に令參上、奉行所迄可言上之旨、椎葉山之輩兼々急度可被申渡者也、仍執達如件、

眞享二丑

六月十三日

(戸田忠昌) 山城守(花押)

(阿部正武) 豊後守(花押)

(天久保忠朝) 加賀守(花押)

相良遠江守殿

一四八 江戸幕府老中連署奉書

(上書) 相良遠江守殿

米良山之儀、如前々鷹巢山被仰付之條、巢山中に弓銃炮一切不可入之、并山畑燒之事爲御停止之間、慶長六年九月廿九日御墨印、寛文四年六月朔日守奉書之旨、彌堅可申付由上意候、此旨米良主膳急度可被申渡者也、仍執達如

幕府頼喬ニ米
良山ノ鷹巢山
タルコトニ就
キ令ス

相良文書

六五三

件、

真享二丑
六月十三日

山城守(花押)

豊後守(花押)

加賀守(花押)

相良遠江守殿

一四九 江戸幕府老中脇坂安董口上覺書案

(包紙上書)
天保十年九月十九日、長福公は兩山御支配之儀被仰出候書付
脇坂中務大輔様へ出ル、

相良遠江守殿

脇坂中務大輔

口上之覺

被相伺候米良山、椎葉山之儀、各々申談候、先規之通可有支配候、家督之度々奉書出候筈ニ及無之付而、不能其儀候、可被存其趣候、以上、

九月十九日

脇坂中務大輔
(安董)

相良遠江守殿
(長福)

幕府相良長福
任セテ先規ニ
ナシテ米良山
任セテ支配
椎葉山ヲ配
セシム
家督ノ度毎ニ
ハ奉書ヲ出サ
ズ

島津公爵家所藏文書

一五〇 島津義久書狀

伊勢大神宮領之事

日州之内水田貳拾町

右地奉寄進畢、倍國家豐饒軍譽之祈精所希也、仍狀如件、

天正七年仲夏十六日

義久(花押)

御炊大夫殿
(天カ)

一五一 島津義久書狀

爲去夏廻禮、今度遮而御使書、珍重候、抑就御入洛之儀、東北士卒可被遂忠勤、粧尤專要候、然處大友家上意疎懷故、來春到豊筑一戰御催、快然之儀候、幸去月六ヶ國之凶徒於日州表悉致誅伐之上、更々御歸京之妨不可有其甲斐候、

島津義久伊勢
神宮ニ日向ノ
水田二十町ヲ
寄進シ奉ル

島津義久毛利
輝元ニ答ヘテ
秀吉ノ來攻ヲ
待ツトイフ

哉、寔雖爲遼遠、混公私倍可申談事本悅候、仍太刀一腰、銀子祝着候、猶五戒坊
可爲演說候、恐々謹言、

(天正十四年)
十二月十日

修理大夫義久(花押)

謹上 毛利右馬頭殿

一五二 島津義久覺書

島津義久秋月
種長下盟約シ
覺書ヲ與フ

一、到福嶋秋月殿滯留之儀候條、爲當家一致可申談事、

一、別而申談儀候條、爲家中之者喧嘩口論可停止事、

但於此上頓出合儀候者、可爲糺明事、

一、逃散之者堅可申付事、

一、科人何方ハ格護有間敷事、

一、惡說中言於有之者、互可尋明事、

天正十七年
五月十五日

龍伯(花押)

島津公爵 樺山文書
家所藏

一五三 征西大將軍宮懷良親王令旨

馳參之條神妙、早可抽軍忠之由、依仰狀如件、

正平十三年六月十八日

(五條良氏)
修理權大夫(花押)

嶋津上總三郎右衛門尉館

一五四 島津氏久給分宛行狀

北郷北方内村々事、注文有爲給分所相計也、任先例可被領掌之狀如件、

貞治四年閏九月廿六日

氏久(花押)

樺山殿

一五五 九州探題今川貞世舉狀

樺山文書

六五七

懷良親王樺山
資久ノ參軍ヲ
褒シ給フ

島津氏久資久
ニ北郷内ノ給
分ヲ宛行フ

今川貞世島津氏久ノ上申セ
ル樺山資久ノ
訴訟チ執事細
川頼之ニ執申
ス

嶋津安藝入道明見申訴訟事、嶋津越後守氏久捧舉狀候、謹進覽之候、可被經
御沙汰候哉、於鎮西致忠節候之間、如此執申之候、以此旨可有御披露候、恐惶
謹言、

永和元年七月十八日

沙彌了俊(貞世)花押

進上 武藏守殿(細川頼之)

懷良親王資久
ノ軍功ヲ褒シ
給フ

一五六 征西大將軍宮懷良親王令旨

合戰之次第被聞食了、尤神妙、彌可致忠節之由、依仰執達如件、

天授三年三月十八日

左少將(胤房)花押

嶋津安藝入道殿(資久)

懷良親王音久
ノ軍功ヲ褒シ
給フ

一五七 征西大將軍宮懷良親王令旨

抽軍忠之由被聞食了、尤神妙者、一品親王令旨如此、悉之以狀、

天授三年六月廿九日

左少將(胤房)花押

嶋津美濃守館(樺山音久)

一五八 島津元久證判息長爲幸質券

(島津元久)花押

要用有ニよて、本物返之質券、賣渡申北郷之内一所、山下一所、布別符之事、

合代用途廿六貫文、米十九石定升エチセン、

右件所領者、爲幸當知行之所職也、仍本物返之質券、賣渡申事實也、己丑年卯三ヶ年お限て本物返ニ賣渡申候、三ヶ年以後者、何時よても候へ、米錢有相次第ニ請申る候、米錢進せさらん間ハ、何ヶ年よても候へ、任此狀之旨可有御知行候、仍爲後日質券之狀如件、

應永十六年己丑三月廿三日

息長爲幸(花押)

一五九 島津久豐所領安堵狀

嶋津御庄日向方本領并當知行事、任本證文之旨、領掌不可有相違之狀如件、

島津久豐樺山
孝宗チシテソ

息長爲幸ソノ
所領北郷布別
符等ノ地ヲ質
入ス

ノ日向方ノ本
領并ニ當知行
分ヲ安堵セシム

應永十九年三月十八日

久豊(花押)

嶋津安藝守殿

一六〇 島津久豊賣券

嶋津庄之内蒲生七郎給分壹町九段、代用途拾九貫仁所令沽却也、早任先例可被領知之狀如件、

應永廿一年四月二日

久豊(花押)

椀山安藝守殿

久豊島津庄内
ノ地ヲ孝宗ニ
賣却ス

足利義教島津
貴久ニ命ジテ
大覺寺義昭ヲ
捕ヘシム

一六一 足利義教御教書案

大覺寺事、分國中居住之由、以前注進之時、委細被仰訖、然者不日可致沙汰之處、於于今延引、如何様子細哉、定雖不可有疎略之儀、不廻時日、令落居者、万代忠節不可過之、併被憑思食候、巨細猶大内修理大夫可申候也、

○本文書、年紀、署判并ニ宛名ヲ關ク、

重ネテ之ヲ命
ズ

一六二 足利義教御教書案

大覺寺在所注進并彼狀取進之、神妙被思食候、不日致計略可上進候、万一其儀不可叶候者、可討進之、雖爲何篇忠節不可過之由、委細彼使被仰含候也、

(永享十二年カ)
六月廿日

一六三 大覺寺義昭軍勢催促狀案

一天四海之逆亂更不得其期、是偏義教公盜行惡逆無當之政道故也、然間於一門之中不退此亂惡者、天命之至落着可及當家滅亡歟之上、別而又爲勝定院之猶子之間、云由緒旁以存立之處、全非私曲之儀、併爲助万民續家門也、依之萬方成下知之間、諸國存其志、既時節純熟之間、急欲全現形、然者應順路之儀、早爲御身方之隨一、致忠節廻計略、可爲御本意、於恩賞、隨望可有其沙汰、猶々軍忠之一段別而憑訖、仍狀如件、

(永享十二年カ)
八月廿五日

在判

椀山殿

大覺寺義昭兵
ヲ擧ゲントシ
孝宗ヲ招ク

一六四 足利義教感狀

就大覺寺事致粉骨之由被聞食候、忠節之至、尤以神妙、仍太刀一腰遣之也、

(嘉吉元年)
四月十三日

(足利義教)
(花押)

(孝久)
樺山美濃守殿

義教孝久ノ大
覺寺義昭ヲ誅
罰セル功ヲ賞
ス

同シク新納忠
續等ヲ賞ス

御太刀

(忠續)
新納 長光

(持久)
北郷 國行

(兼忠)
肝付 同銘

(重恒)
本田 正恒

樺山 國宗

此分被遣候、

一六五 北郷知久書狀

北郷知久段錢
進濟ノコトニ
ツキテ孝久ニ
通知ス

返々其後可申承候之處、聊取亂子細候て無其儀候、所存之外覺候、

段錢進納之時、可爲御一所之由承候しり共、此間料足不調候し程ニ、その
段錢をハ先可有御進上之通申候、是之段錢先三千卷(貫)明日進納仕候爲御意

得御左右申候、返々夫之段錢ハ先可有御進納之由申て候へ共、若未御まい
らむ候ハぬ事もやらんと存候て令啓候、又屋形高城へ御通候哉、いま志

和地へ御座候哉、彼方之御意篇之様、細々示給候者爲悦候、恐々謹言、

六月十四日

知久(花押)

(孝久)
樺山殿

一六六 伊東祐堯書狀

態御音信本悦候、持久よりも御懇ニ御芳問恐悦候、可預御心得候、

如仰雖無差事候、連日可申通候なりら、惣別依世上乍存候處、御音信本意候、
向後者細々可申承候由存候處、御同前承候本望候、就中我々事持久ニ可申

孝久伊東祐堯
ヲ誘ヒテ島津
トイフト結バン

樺山文書

六六三

談之由承候、此境(貴久)與州御逗留之時節候間、難及御返事候、我等意越者御察之
前候哉、猶々慇懃御音問承悅候、每事期來音候、恐々謹言、

(文安元年九)
九月廿六日

(伊東)
祐堯(花押)

榎山殿御返事

一六七 伊東祐堯書狀

如仰一日預御音信候、重而御狀本悅候、兼又此番持久ニ申談候へと承候へ
共、我々意趣者先札ニ細々申候間、不及重言候、向後者細々可申通之由存候
處ニ、御同意ニ承候、本望候、恐々謹言、

(文安元年九)
十月三日

祐堯(花押)

榎山殿

御返事

一六八 伊東祐堯書狀

一日兩度預御音信候、さ様案内自是可令申候處、重而御音札本悅候就中和(正)

祐堯之ニ同ゼ
又

(存)
田高木方ニ一段申談候子細候處ニ、御意も彼面々御同前ニ御談合之由承

候、目出本望候、如此次第兩人方へ巨細申候間、定可被聞召候哉、恐々謹言、

(文安元年九)
十月八日

祐堯(花押)

榎山殿

御返事

色川島津文書

一六九 源賴朝下文

(源賴朝花押)

下 嶋津庄地頭忠久

庄令早召進庄官等事

右件可官之中、具武器之輩、帶兵杖(仗)來七月十日以前可參着關東也、且爲入見參、各可存忠節之狀如件、

文治五年二月九日

賴朝島津庄地頭忠久命シテ兵仗ヲ帶シテ倉ニ參着セシム

一七〇 足利義詮軍勢催促狀案

(赤橋氏)

將軍家御臺所御領日向國穆佐院嶋津庄事、畠山修理亮伊東八郎(祐廣)已下直冬(義顯)與同凶徒等構城鄣濫妨之間、可令對治由、被仰一色少輔太郎入道也、可致合

義詮島津貞久ヲシテ一色範氏ト力ヲ合セ畠山義顯等ノ尊氏室赤橋氏

領穆佐院島津庄ニ濫妨スルヲ停メシム

今川貞世斯波義將之ニ證判ヲ與フ

力狀如件、

觀應三年六月五日

御判

嶋津上總入道殿(貞久)

○裏ニ今川貞世及ヒ斯波義將ノ署判アリ、

一七一 島津師久申狀案

就宅方城沒落事、薩州凶徒等馳集市來院伊作田城、可寄來當所碓山城之由相巧候之間、差向所々通路致合戰用意候之刻、畠山匠作(義顯)以下逆徒等當所打入日向國眞幸院并大隅國下大隅郡之由其聞得候間、當國賊徒等依相待直顯打立時分候歟、引歸面々城鄣候訖、隨而寄來眞幸院候者、定孫三郎殿(一色範親)可有御發向候之間、其時者早々馳參、可致合戰候、亦打入下大隅郡候者、可致後攻之間、可預御合力之由令申彼御方候畢、如此凶賊等令蜂起候之間、難儀無極候、所詮濫谷一族并地頭御家人等、令師久相共致合戰之忠節者、可有抽賞之旨、被成下御教書候之者可宜候、仍御方之仁等交名注文(別紙有之)、令進覽、以此旨

島津師久一色範氏ニ上申シ畠山義顯等チ防カンガ爲メ濫谷氏等諸士ヲソノ手ニ屬セシメラレンコトヲ請フ

可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年四月十日

左衛門少尉師久

進上 御奉行所

一七二 九州探題一色範氏施行地頭職宛行狀案

薩摩國東鄉藏人跡、同一族等跡地頭職事、爲勳功地、日向國北郷之替所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

文和三年八月廿五日

(一色範氏)
沙彌在判

嶋津三郎左衛門尉殿

○裏ニ斯波義將及ビ今川貞世ノ署判アリ、

一色範氏義詮ノ旨ヲ承ケ薩摩國東郷藏人跡地頭職等ヲ北郷ノ替トシテ宛行フ

一七三 島津氏久軍忠狀

島山修理亮直顯以下、爲(足利直冬)佐殿方亂入大隅國之段并國不審事、先日度々言上仕候訖、爰球琳郡凶徒(須惠)、以下之輩、引合肥後國凶徒等、對於少輔孫三郎

氏久一色範氏ニ島山義顯ヲ防ガントシテ戰備ヲ固ウセテ旨ヲ報ズル

殿被合戰候之間、爲合力馳參候之刻、島山匠作得此折、可寄來當城(東福寺并隅州下大隅城 眞幸院)之由、自方々依告申、致用意叡中候、合戰之後、重可令言上、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年九月十八日

左衛門尉氏久上

進上 御奉行所

一七四 島津氏久舉狀案

大隅國下大隅郡肥後彦太郎種顯、同舍弟彦次郎種久等、令同心島山匠作(義顯)、去五日已引入凶徒於郡內崎山城候之間、不移時刻馳向彼城、同十二日攻落候了、爰薩摩國伊集院八郎三郎久孝、谷山五郎良香等參御方之條、先日就于注進、被成下御教書候了、隨而今屬于氏久手、馳越隅州令致忠節候、若此條僞申候者、八幡大菩薩御罰可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年四月廿日

左衛門尉氏久

進上 御奉行所

氏久肥後種顯等ノ據レル崎山城ヲ拔ク
伊集院久孝谷山良香等ノ軍功ヲ範氏ニ上申ス

一七五 赤松滿政書狀

去月十四日御注進、今月九日到來候、則致披露了、抑大覺寺殿御事、依御計略
(義昭)
 早速令落居候、御忠節之至可及御子孫候、異于他候、同日御頸京着候、御感
 余被下御自筆御書候、并御劔國安御腹卷淺黃絲、御馬青被遣之候、御面目之
 至無比類候、尙以自私可申旨被仰出候、就中今度之儀雖御斟酌候、沙汰被申
 候由、御申事御不審之由被仰出候、諸人又不得其意候哉、如此次第能々可有
 御心得候也、將又先度以告文御心中通言上候、今度之儀相當之間、殊御悦喜
 候、次圓宗院事、大學寺殿(覺)にも不相劣思食由之處、被漏之條御無念無極候、如
 何様之次第候哉、且御不審相殘候、早々被尋出之、被召進候者、猶々可爲御忠
 節候、委曲御使令申候、恐々謹言、

(嘉吉元年)
四月十五日

嶋津陸奥守殿

(赤松)
滿政(花押)

赤松滿政島津
貴久ニ書テ與
ヘテ義教ノ大
覺寺義昭誅罰
ニ對スル恩賞
ヲ傳ヘ併セテ
圓宗院ノ搜捕
ヲ命ズ

一七六 赤松滿政書狀

五人面々今度粉骨之由令披露候之間、即被下御書候、并御劔被遣候、御面目
 之至目出候、定而御祝着候哉、尙々今度御忠節異于他候、如何様於向後連々
 可申入候、每事不可存疎略候、御同心候者、可爲悦候、併期後信候、恐々謹言、

卯月十八日

播磨守滿政(花押)

謹上 嶋津陸奥守殿

義教禪山孝久
等ノ大覺寺義
昭ヲ誅セルヲ
賞ス
滿政之ヲ貴久
ニ報ズ

一七七 足利義教感狀

就大覺寺事、以前玄照上洛之時、且雖被仰候、今度儀忠節之至無比類候間、態
 以使者被感仰候、仍馬、太刀、刀遣之候也、

六月十七日

(足利義教)
(花押)

嶋津陸奥守とのへ

一七八 所司代浦上則宗書狀

島津文書

六七一

義教貴久ニ馬
太刀等ヲ與ヘ
テ之ヲ賞ス

浦上則宗五代
友平ニ書ヲ與
ヘテ幕府ノ意
ヲ傳ヘ島津立
久家督禮錢ヲ
徵スルコトナ
カラシムトナ
又日向ノコト
ニツキ伊東氏
ノ言ニ聽カザ
ルベキヲ告グ

足利義政島津
氏一族ニ命ジ
日向ノ諸港ヲ
シテ遣明船ヲ
衛ニ當ラシム

日向古文書集成

六七二

御屋形様之御事承候、委細心得申候、彌長久可申通候、仍御一代國役事、無其
例之由承候、肝要候、自然被仰出時宜候者、其子細可申上候、次日向國事、如何
様ニ伊東方訴訟候共不可有御承引候、若左様之御沙汰候者、當方懸身候て
相支可申上候間、可御心安候、諸篇自先規申合事候間、京都之時、定者乍恐可
有御任候、此趣御下向之時、可預御披露候、恐々謹言、

(鳥津立久)
十月十五日

則宗(花押)

(文明三年カ)
十月十五日
(上書カ)
(友平)
五代筑前守殿

御陣所

浦上美作守

一七九 室町幕府奉行人奉書

渡唐船警固事、日向國中津々浦々、如先々嚴密可被致其沙汰、更不可有遲怠
之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十五年四月九日

(飯尾元連)
前大和守(花押)
(布施英基)
下野守(花押)

嶋津一族御中

北郷文書

一八〇 北郷時久知行宛行目錄

一、法樂寺門

一反

一反冊

一反冊

一反

十

二反

三反冊

二反十

一反廿

ミヤ乃前

觀音免
橋の口

堀町

ウチノめぐり

野村

宮比前

名頭用

堤乃うへ

山比下

北郷時久所領
ナ土持攝津介
ニ宛行フ
法樂寺門ノ坪
付

北郷文書

六七三

狐ヶ迫

一反十	上の川
一反十中	七かきこ
二反	きつ糸う迫
一反冊	同所
一反冊	野中田
一反	同所
一反	上田
一反冊	お母迫
冊	松乃木田
一反	同所
一反十中	風呂乃下
二反冊中	堀町
十中	屋敷ノ下
	ぬく田

西中野門ノ坪
付

已上四町三段廿中

二反	そた崎
二反	堤の下
中	同所
三反十	そき崎
一反	大まこ田
二反	二ほこ
一、西中野門 松河ノくへ	名頭用
一反冊	か、山
一反	水取し
二反冊	やたえ田
三反中	六つえ田
二反廿中	柳乃本
十	同所

北郷文書

くえ渡

同所

同所

堀きり

ひゝ田

下たう泥

野村

同所

同所

已上二町七段卅
惣以上七町一反中

永祿五戌二月十九日

土持攝津介殿

時久(花押)

一八一 南郷中園門坪付

一 南之郷
中園門

四段廿中

一反十

二反卅中

一段中

一反卅

中

卅中

二反十中

二反十

三反 庵の木の替

三反

北郷文書

赤坂

同所

青木ノ前

年神田 あろさろ

名頭用 かり屋

く底抄 せとれ口

堀町 同所

桑原田

同所

道場前

帯田

三反

むろふ田

一反

せと田

一町

下十五

以上二町

永祿五^{壬戌}三月二日

一八二 北郷時久置文

時久末吉中之
城跡ヲ土持孫
五郎ニ與ヘン
コトヲ約ス

末吉中之城一跡之事、爲土持之次男彌寢孫五郎契約、万一夫妻相違之時者、所領之事女子可爲進退之狀如件、

永祿十三年^{庚午}三月吉日

(北郷時久)
一雲(花押)

一八三 島津義久契狀

起請文

島津義久時久
ト盟約シテ伊

一、對伊東弓箭雖不新候、別而御入魂可爲一味事、并此方庄内肝付之間、讒言

東氏ニ當ラン
トス

之時者、則左右方ニ可申理、又無腹臟可承事、
右於違犯者、

奉始上者梵天帝尺四大天王、下者堅牢地神、惣日本朝中大小權實神祇、別者當國鎮守新田八幡、開門正一位、殊者當所諏訪上下兩大明神、并天滿大自在天神部類屬衆現當兩罰可蒙者也、仍起請文如件、

天正貳年甲戌

九月拾日

義久(花押)

北郷左衛門入道殿

一八四 島津家年寄連署契狀

起請文

島津家年寄衆
モ亦時久ト盟
約ス

一、對伊東弓箭雖不新候、彌御一張被仰合、可爲御入魂事、
一、今度御談合之行隱密之事、
一、此方庄内肝付之間、讒言之時者、承付次第左右方へ無腹臟申披、可被仰披

北郷文書

六七九

事、

右條々於違犯者、

奉始上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神、惣日本朝中大小權實神祇、別者當國擁護新田八幡大菩薩、開門正一位、殊者當所諏訪上下兩大明神、天滿大自在天神部類眷屬御罰可罷蒙者也、仍起請文如件、

天正貳年甲戌九月拾日

(朱書下同)
伊集院右衛門
忠金(花押)
平田美濃守
昌宗(花押)
村田越前守
經定(花押)
川上
意鈞(花押)

北郷(時久)一雲齋
人々御中

一八五 島津義弘契狀

起請文

一、對伊東弓箭雖不新候、彌御一張被仰合、可爲御入魂事、

島津義弘モ亦盟約ス

一、今度御談合之行、隱密之事、

一、庄内眞幸之間、從何方及讒言之時者、承付次第左右方口無腹臙申披、可被仰披事、

右條々於違犯者、

奉始上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神、惣日本朝中大小權實神祇、別者當國擁護新田八幡大菩薩、開門正一位、殊者當所諏訪上下兩大明神、天滿大自在天神部類眷屬御罰可罷蒙者也、仍起請文如件、

天正二年甲戌九月十一日

(義弘)
忠平(花押)

北郷(時久)左衛門入道殿

一八六 近衛前久書狀

遙久不能書信、遺恨候、仍日州之儀、義久如存分成行候之由、千萬珍重候、則可差下使者候處、拙者事者右府(信長)へ一味申、別而入魂被申二付、敵地擇一圓不成合期候間、無其儀候、更非疎意候、自然可然之樣取成、可爲祝着候、將又愚身事、

近衛前久書ヲ
時久ニ遺リ島
津義久ノ日向
一統ヲ變シ又
大鷹ヲ所望ス

信長一段馳走無疎意樣躰、施面目事候、於時宜者貞知可申越候、可心安候、次
内々約束候大鷹、如何様ニも此節所望候、以馳走義虎迄於被越之者、可爲喜
悅候、偏才覺此時候、先年之鶴于今令所持候、逸物無比類候、大鷹共ハ悉右府
へ進之一居も無之候、猶期後音候也、

(天正六年カ)
卯月七日

(奉書)
〔近衛前久〕
〔花押〕

(上書)
北郷左衛門入道とのへ
〔北郷左衛門入道とのへ〕

(前久)
〔花押〕

一八七 島津義久契狀

起請文

今度大友家邪路之防戰企故、依諸口雜說、以御誓紙條々被顯心肝、承悅尤不
少、於永代彌可致同懷事、不可有改替者也、
若令違犯者、

奉始上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣日本國中大小神祇冥道、別當國惣

義久時久ト共
ニ大友氏ニ當
ラシコトヲ盟
約ス

社新田八幡大菩薩開門正一位、天滿天神、殊者鹿兒嶋鎮守諸大明神等部類
眷屬神罰冥罰可罷蒙者也、仍起請如件、

天正六年七月廿日

義久〔花押〕

北郷左衛門入道殿

一八八 飛鳥井雅繼書狀

追而令申候、扇子二本進候、哥ハ梶井門跡御筆よて候、御音信迄候、

雖未申通候、令啓候、去年不慮ニ右兵衛督相果候、然共爰元之儀モ不相替、從

信長殿被仰付候間、可御心易候、仍今度於向州表被盡粉骨、御存分ニ成候儀、

御一身之御手柄之由、京都無其隱候、寔寄特存候、使者差下申度乍心中、信長

殿御上洛切々之間、取紛無其儀候、於爰元相似之御用候ハ、可被仰上候、猶

志水入道可申候、恐々謹言、

(天正七年カ)
六月十八日

(奉書)
〔飛鳥井殿〕
雅繼

北郷一雲入道殿

北郷文書

飛鳥井雅繼音
物ヲ遺リテ時
久ノ日向一統
ヲ賀ス

北郷一雲入道殿

雅繼

一八九 島津義久契狀

義久時久ニ數
個所ノ城及ビ
所領ヲ與ヘン
事ヲ約シテ忠
勤ヲ抽テシム

今度以神載、永々可爲無二之忠、懃旨趣、尤肝心、就夫當知行證文之事、雖不改、御懇望之條、數ヶ所之城所領、無異儀令宛行之狀如件、

天正七年拾二月廿三日

義久(花押)

北郷左衛門入道殿

義久

北郷左衛門入道殿

義久

一九〇 豊臣秀吉覺書案

秀吉島津氏ト
媾和ス
久保ニ飯野城
及ビ眞幸院ヲ
與フ

一、義久、義珍御赦免之儀、忝存付而、不殘心底、人質致進上、并兵庫頭居城日向之内にて候とて、御理不申明可申之由、被及聞召候、左様候へ、兵庫頭可之在所不相定可迷惑候間、右之飯野城付眞幸郡又一郎、可取之候事、

大隅ヲ義弘ニ
與フ

一、大隅之儀、物主可被仰付、雖相定候、右兩人始メ伊集院無親疎躰ニ見及候間、兵庫頭ニ大隅之儀可遣旨思召候事、

一、此上者兵庫頭質物別ニ一人可出之由、又一郎儀ハ御側被召仕、自分爲部屋栖眞幸郡被下候、其上御扶持方高上方ニ而可被仰付候、左候得ハ兵庫頭格護相ちかひ候とも、又一郎儀ハ不便ニ被思召候條、人質ニ來間敷事、

伊集院ヲ忠棟
ニ與フ

一、大隅之内伊集院右衛門太夫居城ニ付一郡之儀者、最前より右衛門太夫ニ被仰付候條、可得其意候事、

佐土原及ビ城
付ノ知行ヲ家
久ニ與フ

一、嶋津中務少輔儀、人質を出居城を明、中納言ニ相つき、上りニ罷上、似合之扶持をうけ、可有奉公之由、神妙被思召候間、日向之内、佐土原城并城付之知行以下あげ候とて、可被召上儀ニあらず候間、是亦中務少輔可被返下事、

北郷時久ハ人
質ヲ出サバ大

一、嶋津右馬頭儀者、義久次第ニ致覺悟、人質を召連、御本陣へ相越候間、向後まては、彼之城相立、本知無相違様、兵庫頭可申付事、
一、本郷儀人質を出候ハ、大隅之本知無相違様可申付候事、

隅本知行分チ
與ヘ日向分ハ
ソノ人質分ト
シテ與フベシト

一、日向之内ニ北郷當知行千町計有之由候、これハ國切之事候之間、人質之外ニ子_{シテ}を壹人又一郎同前ニ相つめさせ、奉公於有之者、右之千町其身ニ可被下事、

一、兩條ニ一ヶ條於相背者、彼北郷可被成御成敗候間、得其意彼城可取卷人數之事、

一、中納言、毛利右馬頭(輝元)備前少將、大友左兵衛督、小早河左衛門佐、吉川治部少(隆景)

輔、宮部中務卿法印、蜂須賀阿波守、長宗我部宮内少輔、尾藤左衛門尉、黒田(家政)

勘解由、嶋津修理太夫、同兵庫頭、兩國之人數を召具、取卷相果可申候、左様候者、其跡臧大隅之内之儀者、兵庫頭ニ可被仰付候事、

一、右北郷於相背者、御下知者、其面在陣之衆へ、悉不殘兵糧可被下候之間、可(三成)

得其意候、猶安國寺、石田治部少輔可申候也、

五月廿六日 御朱印

嶋津兵庫頭とのへ

豊臣秀長北郷
時久ニ法度書
ヲ與フ

一九一 豊臣秀長書狀

以上

先日申渡國々法度書付進之候、猶於様子者、福智三河守(長通)可申越候、諸事有相談、儘可被申付事簡要候、向後聊不可有踈略候、謹言、

六月十五日

秀長(花押)

北郷左衛門入道殿

一九二 島津義弘契狀

敬白 起請文之事

一、當家中爲何轉變雖在之、對一雲并讚岐守殿、向後無二可申承事、(時久)

一、自他國之諸侍雖逆心企候、一味有間敷之旨、委細承置候之事、(忠虎)

一、讒者讒言并雜說等之儀、承付之由申通、又可示賜、依時宜實否可有糺明之事、

義弘時久忠虎
ト盟約ス